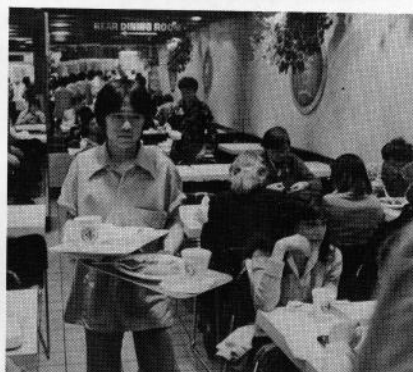


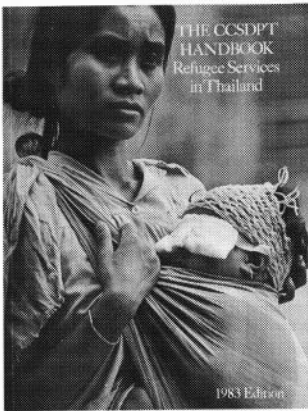
# Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—— 試行錯誤 ——

## 特集 インドシナ難民





CCSDPTハンドブック、1983年版  
「タイにおける難民救援活動」表紙

## インドシナ難民の実情を知るために

インドシナ難民については、多くのことが語られてきたが、ここではタイを中心に、インドシナ難民の実情を知るためのなるべく基本的、客観的な資料の提供を試みた。CCSDPT（7p.参照）のハンドブック（Refugee Services in Thailand, 1983, Edition：写真）が主要な情報源である。邦訳および文責は編集部にある。なお、これまで日本で出版された「難民問題主要文献目録」が、UNHCR駐日事務所から出版されている。

### 難民とは

戦乱や抑圧、天災などのために、住んでいた土地を離れざるを得なくなり、生活のすべを失い、国境を越えた人々を一般に難民と呼んでいる。国家から切り離された人々に対しては、国際的な保護と援助が必要となる。

国連で採択され、世界96カ国が加入している、「難民の地位に関する条約」とその「議定書」は、難民(Refugee)の定義を、「人種、宗教、国籍、特定の社会的集団への所属、または政治的意見を理由に迫害を受けるという、十分に根拠のある怖れのために、自国の外にあって、かつ、自国の保護を受けることのできない者、または、このような怖れのために自国の保護を受ける意思を有しない者」としている。

インドシナ難民の場合は、すべてが条約にいう難民とみなされるわけではない。しかしUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)はインドシナ難民に対して実際的な援助を行っている。

表紙写真説明

タイ・カンボジア国境 食糧配給 野中 章弘	ラオス難民 山岳民族の 伝統的手芸 UNHCR 提供	タイ・カンボジア国境
タイ・カンボジア国境	ベトナムの ボートピープル マレーシア沿岸 UNHCR 提供	アメリカに 定住した ラオス難民 UNHCR 提供
	カオイダン カンボジア難民 キャンプ	

## 目 次

//特集//インドシナ難民	“仮り住い”の16万人 — 東南アジア各国 …………… 20
地図・東南アジア各国に一時滞在する難民 …………… 3	に留まるインドシナ難民 UNHCR「REFUGEES」他より
カンボジア難民/ラオス難民/ベトナム難民 …………… 4	統計資料でみるインドシナ難民 …………… 24
年表/難民問題はどうか解決されるか …………… 5	プロジェクト紹介
タイで難民救援活動にたずさわる機関 …………… 6	“生きのびるための”実用トレーニング …………… 26
タイ政府/国際機関/CCSDPT	ICARA II 今、解決を求めて …………… 28
タイ国内の難民キャンプ	アフリカ難民援助国際会議
カオイダン、カプチューン …………… 8	ザンビア/タンザニア
シキウ、ソンクラ …………… 9	声 おたより/特別寄稿 …………… 30
ナコンパノム(ナポー)、ウボン …………… 10	JVCプロジェクト …………… 32
バナニコム …………… 11	JVCNEWS …………… 34
タイ・カンボジア国境の難民村 …………… 12	
民間団体によるタイでの難民救援活動一覧 …………… 14	
タイで活動する民間団体リスト …………… 16	
資料・日本国内のインドシナ難民 …………… 19	

# 特集 インドシナ難民

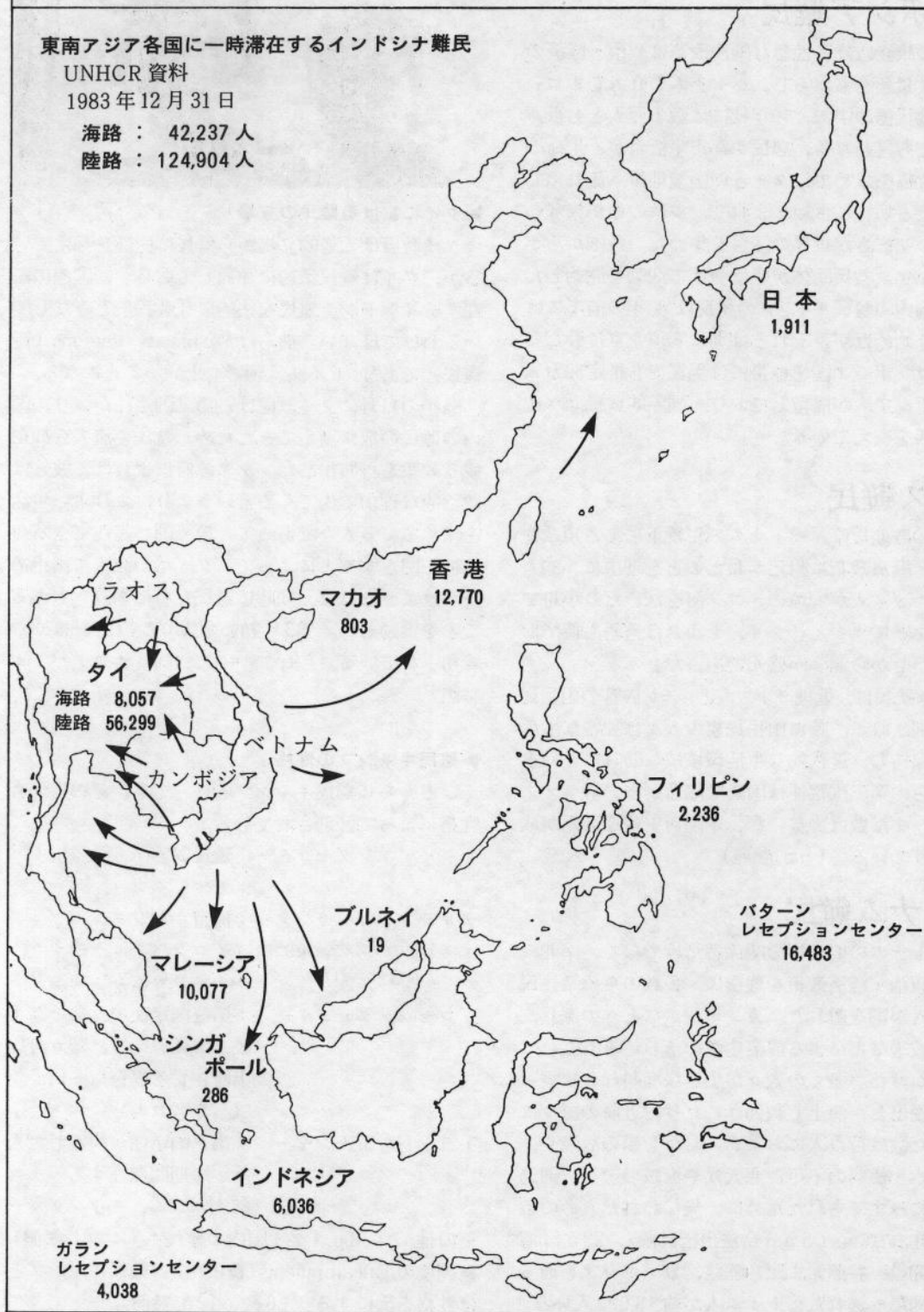
東南アジア各国に一時滞在するインドシナ難民

UNHCR 資料

1983年12月31日

海路：42,237人

陸路：124,904人



(このページの文責は編集部にある)

## カンボジア難民

'75年の政変以降の性急な国内改革は政治・経済の破綻と大量死をもたらし、ベトナムの介入をまねいた。内戦状態の中で、'79年秋には数十万人とも百万人以上とも言われる、農民や都市生活者が、生命の安全と食糧を求めて、タイとの国境地帯へ流れ出した。飢えと病いにさいなまれて、多数の命が失われ、その悲惨さが世界の注目を集めた。各国からボランティア、救援団体が駆けつけて活動を開始した。

タイ国内の難民キャンプの状況は'80年の前半には落ちつき始めたが、それとは別に800キロにわたるタイ・カンボジア国境地帯には現在でも推定30万人のカンボジア人が滞留しており、国際的な援助が彼らの生活を支えている。

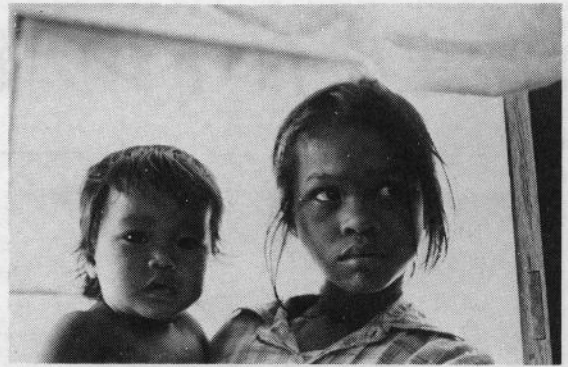
## ラオス難民

'75年の政変以降、ベトナムの影響下にある現政権の政治・経済政策に耐えかねたことを理由に、30万人近いラオス人が国境のメコン河を泳いだり小舟で渡ってタイに入った。タイ、ラオスは言語も似ており、むかしから通商が盛んであった。

ラオス難民は、低地ラオス人と、モン族等の山岳民族に大別される。特に山岳民族の人々は独特な生活様式を保持し、近代的な生活環境になじみにくいところから、第三国定住は困難な場合が多い。ラオスの場合、まだ数は少ないが、本国自主帰還計画が成果をあげている。(5p. 参照)

## ベトナム難民

南ベトナムの旧政権の関係者だけでなく、南北統一後の政治・経済政策を理由に、多数の華僑系住民や一般人が国を離れた。カンボジアなどへの派兵、洪水の被害などによる農業生産の落ち込みもこれに拍車をかけた。多くの人々が小さな漁船などに乗って海に脱出し、海上で救助されたり、近隣の国々に漂着した数は百万人におよぶ。しかし船の故障や、食糧・水・燃料の不足、悪天候や海賊の蛮行、通過する船にみすてられたために、失われた人命の数は計り知れない。(5p.『合法出国計画』, 23p.『海賊との闘い』参照) また、陸路、カンボジアを通過してタイ国境へ逃れたベトナム人が約13,000人いる。



### ▶タイにおける難民の立場

タイ政府は人道的立場から難民に庇護を与えているが、タイは難民条約に加入しておらず、国内に滞在するインドシナ難民を法的に「難民」とみなしているわけではない。彼らは Displaced Persons (避難民) であり、「不法入国者」ということになる。

'81年の11月にタイ政府は、第三国定住が減り、国内の難民の数が増えてきたため、難民の流入を抑止する政策を打ち出した。タイ政府によれば、彼らは政治的な理由で出てくるというより、よりよい生活を求めてくる人々であって、第三国へ定住できる可能性を閉ざすことによって、タイへの流入に歯止めをかけようとした。同時に難民たちに本国へもどることを奨励した。'83年初め頃よりこの方針はやや緩和されている。(9p. シキウ, 10p. ナコンパノム参照)

### ▶難民キャンプの性格

ひとくちに難民キャンプといっても、その機能や性格によって区別されている。

ホールディングセンター：難民収容所  
(カオイダン)

ディテンションセンター：拘留キャンプ  
(上記のタイの政策により設けられた) (ナコンパノム, シキウ, チェンカム)

プロセッシングセンター：第三国定住のための諸手続、準備を行う。数カ月以上滞在する場合も多い  
(パナニコム)

トランジットセンター：第三国定住が決定した人々が短期間滞在する  
(パナニコム, スワンプルー)

その他 (8p.『タイ国内の難民キャンプ』参照)

▶国境の Encampments (難民村) は難民キャンプとは性格を異にする。(6p., 12p. 参照)

## 難民問題はどう解決されるのか？

難民問題を根本的に解決するには、原因となった政治的・経済的・社会的問題の解決を待たねばならず、多くの場合困難で時間を必要とする。

UNHCRは、難民となった人々の恒久的解決として、次の3つの方法をあげ状況に応じてその実現に努めている。

### 1. 本国自主帰還

本国自主帰還計画は、難民が祖国へ帰れるだけでなく、帰る人がいるということで難民の新たな流出を抑止できる。UNHCRが難民たちの意志を確認し、彼らの祖国、現在いる国の政府の間に入って計画を進めている。安全に帰れること、帰国後 UNHCR 職員が彼らに接触できることなどが条件となる。

ラオスへの帰還者は'80年以来3,000人未満だが、その後も続いている。ただラオスの経済基盤が弱いため多数の帰還者を受け入れるのは難しい。カンボジア難民の場合は'80年に一部実施されたが、軍事的緊張状態となって中断され、今までのところ進展はない。

### 2. 一時庇護国定住

インドシナ難民のほとんどが最初に保護を求めて入った東南アジア諸国は、いずれも難民が国内に定住することを認めていない。タイを始め各国とも難民を一時的に受け入れ、庇護を与えている。

### 3. 第三国定住

一時庇護国定住が認められず、本国自主帰還がごく限られた数しか実現していないインドシナ難民は、第三国(祖国、一時庇護国に対して第三国)に定住する例が多い。難民の受入国はアメリカ、カナダ、オーストラリアなど。これまでに百万人以上が定住し、新しい生活を始めている。

(24p. 資料参照)

### ベトナムからの合法出国計画

1979年5月、ベトナム政府と UNHCR の間で「合法出国」に関する覚書が取り交された。これによって、すでに第三国に在住する近親者との再会など、人道的場合に限り、「ポート」ではなく安全に出国することが可能になった。第三国側から受入れ可能者リスト、ベトナム側から出国可能者リストを受け取った UNHCR は、両方に載った人だけでなく、片方だけの人の出国も実現するよう努力している。

『\*24p. 統計資料参照』

## インドシナ難民関連略年表(文責, 編集部)

- 1946 ●第一次インドシナ戦争始まる
- 1953 ●カンボジア、ラオス、フランスから独立
- 1954 ●ベトナム、抗仏戦の末、ジュネーブ協定を結ぶ。南北分割。(ベトナムは19世紀末にフランスの植民地となるまで、千年にわたり中国の支配を受けた。1940～45年には日本軍が仏印に進駐。)
- 1959 ●ラオス王国軍とパテトラオ軍(ラオス愛国戦線)の間で戦闘始まる。
- 1960 ●南ベトナム解放民族戦線結成。
- 1961 ●第二次インドシナ戦争勃発。米軍介入。
- 1965 ●米軍、北ベトナム爆撃(北爆)開始。
- 1970 ●カンボジア、ロン・ノルによるシアヌーク追放クーデター。
- 1973 ●ベトナム和平協定調印。米軍撤退。
- 1975 ●カンボジア、ロン・ノル政権崩壊。  
●ベトナム、チュウ政権崩壊。サイゴン陥落、10万人以上の難民がアメリカへ。  
●ラオス、右派勢力崩壊、民主人民共和国となる。●インドシナ難民流出始まる。  
●UNHCR、タイで活動開始。
- 1976 ●民主カンボジア政府樹立。波尔・ポト首相就任。(都市住民の強制移住、通貨廃止などが行われた。) ●南北ベトナム統一。
- 1978 ●ベトナム南部で私営商業経営を禁止。通貨統一。中越関係悪化。華僑系ベトナム人16万人中国へ。
- 1979 ●1月、カンボジアで、ベトナムの支援を受けた救国統一戦線、プノンペン制圧。カンボジア人民共和国(ヘンサムリン政権)樹立。プノンペンを追われた民主カンボジア(クメール・ルージュ)はタイとの国境地帯に逃がれ、以後他の反共組織との離合集散を繰り返し、抗越ゲリラ戦を展開。●2月、中越戦争。●4月、日本政府500人の枠でインドシナ難民の定住受入れを決定。●4月、カンボジア難民の大量流出始まる。●6月、ボートピープルの流出ピークに達する。●ベトナムからの合法出国計画始まる。●7月、ジュネーブでインドシナ難民に関する国際会議開催。26万人の受入れ枠が決まり、第三国定住がすすめられる。●9月、カンボジア難民タイに大量流入。緊急救援活動が始まり、惨状が報じられる。●11月、タイ政府 UNHCR に援助要請。カオイダン難民収容所開設。●12月、日本政府、医療チーム(JMT)を派遣。
- 1980 ●1月、WFP/UNBRO 設立。●2月、緊急状態を一応脱し、個人ボランティアはキャンプから締め出される。JVC、バンコクで設立。●6月、タイ政府、UNHCR によるカンボジア難民の本国自主帰還計画、ベトナム軍の攻撃により中止。
- 1981 ●7月、ASEANの提唱による国連カンボジア国際会議開催。●7月、タイ政府難民流入を抑止する政策を発表、キャンプの統廃合が始まる。
- 1982 ●1月、日本、難民条約に加入。●7月、シアヌーク、キュー・サンファン、ソン・サンの三派、民主連合政府樹立を宣言。
- 1983 ●1月、ベトナム、ヘンサムリン軍攻勢によりノンチャン難民村壊滅。●11月、日本の定住枠5,000に拡大。

## タイで難民救援活動にたずさわる機関

### <タイ政府>

#### ●国家安全評議会 (The National Security Council)

タイ国内の難民政策に関する最高決定機関。首相を最高指揮官とし、主な省庁の大臣とタイ国軍の高級将校で構成される。政策の実施にあたるのが、内務省とタイ軍最高司令部の2機関。

#### ●内務省 (The Ministry of Interior)

内務省の執行本部 (Operation Center) は、タイ国内の低地ラオス人・山岳民族・ベトナムからのボートピープルの全ての難民キャンプおよびパナニコムを管轄している。内務省は、キャンプの管理運営および基本的サービス (建設, 食糧供給, 給水, 公衆衛生等) を行う責任を負っている。また, UNHCR から民間団体に支給される資金の仲介をすることによって内務省は他のサービスにも関与している。

#### ●タイ軍最高司令部 (The Supreme Command of the Royal Thai Armed Forces)

軍最高司令部とタイ国軍の合同執行本部は、タイ国内およびタイ・カンボジア国境沿いのカンボジア難民に関する、全ての計画立案・管理運営・調整を行う責任を負っている。また、その管轄下にある難

民キャンプ・国境沿いの難民村および難民流入により影響を受けたタイの被災民について責任を負っており、救援活動を指揮監督している。同執行本部は、タイ国の陸海軍と密接な協力関係をもち、難民キャンプおよび国境におけるカンボジア難民に関して、国の政策を履行する責任を負っている。

#### ●保健省

難民キャンプにおける医療計画に直接の責任を負っているわけではないが、難民キャンプの医療方針を明確にしたり、キャンプの医療施設と周辺地域の医療施設との連絡をしたりする。しかし、いくつかの内務省の管轄下のキャンプでは、保健省が給水と公衆衛生の計画に直接責任を負っている。

#### ●教育省

難民キャンプの教育プログラム全般にわたる責任を負っており、キャンプ内で使用される全教材は教育省の承認を得なければならない。内務省管轄のキャンプでは、教育省が実施の任にあっており、地元のタイ人教師を雇用したり教師の訓練のための便宜を計っている。

### <国際機関>

#### ●国際連合 (United Nations : 国連)

国連は UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees : 国連難民高等弁務官事務所) を通じて、タイ国内の難民に関する仕事に主要な役割を果たしている。さらにタイ・カンボジア国境沿いに滞留するカンボジア人<sup>(注)</sup>、難民流入の影響を受けた、国境付近のタイの村人 (タイ被災民) に対するプログラムがある。これは国連カンボジア人道援助計画調整担当事務総長特別代表 ('84年3月に功刀達朗氏が就任) の権限の下にある。

#### ●国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)

1951年1月に難民の、国際的保護と恒久的解決を求めるために設立された。UNHCRは'75年からタイで活動を開始し、'79年からはタイ国内のキャンプにいるインドシナ難民の大集団に対する、食糧・避難所の用意その他のサービスの調整を行う責任を負っている。(UNHCRはタイ・カンボジア国境で

の活動は行わない。)

'79年から'80年の初めにかけて、UNHCRは直接タイにおける難民救援に関わるようになったが、それ以降は本来の役割に戻り、政府の関係省庁・国際機関・ボランティア団体といった活動を実施する協力者を通じて、難民へのサービスを行っている。現在 UNHCR は、タイ国内で難民救援活動を行うボランティア団体の活動を、調整、モニター、評価し、また資金の一部を負担したりしている。

当初から UNHCR はタイにいる難民のための、可能な恒久的解決を探る過程に関わってきた。UNHCR は難民の国際的保護のために、難民の庇護・定住・本国自主帰還に関係するすべての国々と継続的な交渉を続けている。

#### ●世界食糧計画 (WFP)

国連食糧農業機構 (FAO) の関係機関である世界食糧計画は、タイ国内の難民に食糧を供給する責任

を負っている。内務省と UNHCR を通してベトナム人、ラオス人、そして山岳難民のキャンプで活動している。WFP は、次に記述されている、世界食糧計画/国連国境救援機関 (WFP/UNBRO) の運営の責任も負っている。

### ●世界食糧計画/国連国境救援機関 (World Food Program/Border Relief Operation 以下、WFP/UNBRO)

WFP/UNBRO は、国連カンボジア人道援助計画調整担当事務総長特別代表の権限の下に、タイ・カンボジア国境沿いにあるカンボジア難民と、難民流入の影響を受けているタイ人の村人に対し人道的援助を行っている。その活動は、タイ国軍最高司令部の合同執行本部を通じて実施されており、必要と思われる所には食糧・水・避難所用資材 (ビニール・シート、竹、ヤシの葉等)・蚊帳・バケツ・野菜の種等を支給している。

WFP/UNBRO は、14 のボランティア団体が行う医療・公衆衛生・弱い立場のグループ (病人、妊婦、子供など) への特別給食、そして社会サービス等のプログラムの調整と資金援助をしている。WFP/UNBRO は、無線通信システムを通じて国境の難民村で働く国連機関およびボランティア団体の人々の安全の確保のための調整をしている。

### ●国際赤十字委員会 (International Committee of Red Cross 以下 ICRC)

ICRC は、'79 年の難民危機の当初の期間、タイ国内に於て最も活発に活動した。ひき続き、主としてタイ・カンボジア国境で、医療・郵便物の取り扱い・家族捜しなどの業務を行っている。カオイダンとカプチューンにある ICRC の病院だけが、この地域

で難民の利用できる外科手術設備である。

ICRC は、1949 年のジュネーブ協定にもとづく伝統的な任務の遂行と同時に、国境沿いの難民特に最も弱い立場にあるグループの人々の保護に積極的役割りを果たす努力を続けている。

### ●国際移住委員会 (Intergovernmental Committee for Migration 以下 ICM)

ICM は、該当国の大使館によって定住の手続きの終了した難民の移動に責任を負っている。また ICM は医療手続きと適当な移動手段を手配する。この機関は、最近ベトナムからの陸路難民の定住に携わった。

### ●タイ赤十字社 (Thai Red Cross Society 以下 TRC)

9 部門ある TRC の中の 1 部門が難民援助を行っている。その活動は緊急援助に限らず、タイ・カンボジア国境沿いの地域、カオイダンおよび内務省管轄下のキャンプにおいて、広範に及ぶ管理・医療・家族捜し (後者は、ICRC との連繋) などの業務を行なっている。

TRC は、UNHCR からの資金援助により、タイ国内のキャンプで活動する奉仕団体に、定期的に幅広い種類の医薬品を支給している。TRC はまた、カオラン・キャンプの全ての救援活動に対し、全面的責任を負っている。

(注: 国連およびタイ政府は、これらのカンボジア人を「難民」とみなしていない。国境のカンボジア人は displaced persons, その居るところは border encampments と呼ばれる。T/E では、タイ国内の難民収容所を「難民キャンプ」とし、国境については「難民村」と呼んで区別している。

### ●CCSDPT: タイにおける難民救援調整委員会

Committee for Coordination of Services to Displaced Persons in Thailand

タイで難民に対する活動を行っている民間団体は 60 近くあるが、そのうち 45 団体が CCSDPT のメンバーとなっている。CCSDPT はタイにインドシナ難民が流入し始めた '75 年に、15 団体が集まって設立されたもので、定期的に会合を持ち、情報・意見の交換を行ってきた。

'78 年から '80 年にかけてのカンボジア難民の大量流出の後、メンバーが急増し、81 年の中頃には 52 団体となった。

CCSDPT の目的は、タイ政府・国際機関・UNHCR ・関係各国大使館・資金拠出国等に対して、民間団

体の共通の利害を代表することにある。その役割は、各参加団体に関して、難民救援活動を進めていく上での、①合意による調整を計る。②共通の取り組み方を展開してゆくための論議の場を提供する。③現場の情報を集約するなど。

運営費は主としてメンバー団体からの出資 (年額 1,000 ドル) によってまかなわれており、一部 UNHCR から補助されている。毎年、議長と執行委員が選ばれ、バンコクの事務所では少数の事務局員が、各団体からあがってくる問題への対処、各団体とタイ政府等との日々の連絡といった仕事、および情報の収集整理、ニュースレター「Perspectives」の発行を行っている。

## タイ国内の難民キャンプ



環境：家は、ラテライトの地面の上に雨期に耐えようよう高床式に、竹とヤシの葉で作られている。トイレは汲み取り式でキャンプの裏で処理される。排水溝はキャンプ全域に掘られている。ゴミは手押し車で回収され、焼却された後二カ所のゴミ捨て場に埋められる。

水の供給は常に問題となっている。井戸はいくつかあるが、さらに別の地下水脈を見つけることは難しい。背後の山向うにある貯水池からもいくらか水を得ているが、大部分はキャンプ周辺の井戸からトラックで運び込まれている。

援助活動：基本的に必要な食糧、衣類、建物、医療などは、ボランティア団体によって提供されている。400床ある病院では、キャンプ内の住人だけでなく、タイ・カンボジア国境地帯の中央地域から運ばれてくる傷病者にも医療活動を行なっている。衛生検査所、外来診療所3つ、ヘルスケアセンター4つ、補助給食センター4つ、伝統医療センター等もある。歯科医療、結核やライ病の治療、リハビリテーション、カンボジア人への医療従事者養成も行なわれている。また、教育、民族芸能、手工芸やレクリエーション活動や、高度な技術教育だけでなく、託児所、就学前の教育、初等教育、識字教育等幅広く行なわれている。その他、ボランティア団体は、せっけん造り、水がめ造り、パン作り、木工品作り、木彫、縫製、編み物、鍛冶、トタン鍛冶、魚の養殖、製米などの技術訓練や自助活動を後援している。心身障害者、老人、孤児、失業者にはカウンセリングや特別なサービスもある。住人達は、様々のバラエティに富んだレクリエーションや文化的活動を提供されている。

### カオイダン (ホールディング・センター)

プラチンブリ県タブラヤ地区

管轄：タイ軍最高司令部

収容人数：44,671人 カンボジア人

位置：バンコクの東235キロ、アランヤプラテートの北15キロ

背景：1979年11月に開かれた。1980年6月には、収容人口は12万～14万人まで増加した。このように多数の流動的な収容人数を正確に把握するのは難しく、公式及び非公式の数字にはいつもくい違いがある。その後収容人数は5万～6万人に減少したが、タイ・カンボジア国境付近の難民村を除いて、タイ国内の難民キャンプの中では最大の人数である。

### カブチューン (特別キャンプ)

スリン県カブチューン地区

管轄：タイ内務省

収容人数：875人 カンボジア人

位置：バンコクの東北東460キロ、スリンから50キロ  
背景：カブチューンは、1980年8月軍最高司令部の運営のもとにカンボジア人収容所(ホールディングセンター)として開かれた。

援助活動：1983年1月、病院が開かれ、国境の難民村では扱えない重病者の治療や外科治療のため、北部国境地帯から患者が送られてきている。治療が終ると、患者たちは病院から国境に戻る。ここでは医療保健活動のみが提供され、周辺のタイ人に対し

でも医療サービスが行なわれている。

## カオラン (特別キャンプ)

トラート県ムアン地区

管轄：タイ赤十字

収容人数：371人 カンボジア人

位置：バンコクの南東384キロ

背景：1979年5月、深刻な栄養不良や慢性の胃潰瘍やマラリアに悩むカンボジア人に、タイ赤十字が医療チームを派遣し、緊急援助物資を送った。タイ赤十字総裁である王妃の訪問のあとカオランキャンプは建設された。タイ・カンボジア国境付近の子供達を受け入れるにつれ、その数は徐々に増加し、1983年8月の時点では、230人の孤児達が生活していた。

## クロンヤイ (特別キャンプ)

トラート県クロンヤイ地区

管轄：タイ内務省

収容人数：(資料なし) カンボジア人

位置：バンコクの南東470キロ

背景：小さな漁村クロンヤイは、カンボジアと海にはさまれた所に位置し、もともとの人口は9千人程であった。この数年間で、もとはタイ領で今はカンボジアの一県となったクロン島(コー・クロン)から逃げてきたおよそ7千人が加わった。この人達はタイ語を話し、多くの人は、タイに親類をもっている。タイ社会への定着はそう困難なことではない。ほとんどの人は漁師なのでタイでもその仕事を続けている。

また「農業と村落運営のための基金」(The Foundation for Agricultural and Rural Management)というタイのボランティア団体がノルウェーの難民問題協議会の援助を受けていくつかのプログラムを行なっている。

## ソククラ (仮設避難所)

ソククラ県ムアング地区

管轄：タイ内務省

人口：212人('83年7月末現在、人口は流動的)

ベトナム人

位置：バンコクの南1,274キロ、市街から8キロ

背景：ソククラ仮設避難所は、タイ湾に面した海岸にある。タイ国南部に漂着したベトナム難民を収容するため、1979年1月に開かれた。このキャンプ

は、ボートピープルの流出を妨げるため表向きは、1981年8月15日に閉鎖された。

援助活動は基本的なものに限られるが、海賊行為や女性難民への暴行、誘拐が多いため、暴行被害者やその家族のためのカウンセリングが行われている。

## シキウ (拘留センター)

ナコンラチャシマ県シキウ地区

管轄：タイ内務省

人口：8,193人 ベトナム人

位置：バンコクの北東310キロ、市街から60キロ

背景：シキウは、タイ北部のナコンラチャシマ(コーラート)近くの孤立した地域にある。1976年1月にラオスから来た少数のベトナム難民とサタヒップから移動してきたボートピープルを収容するために開かれた。これらの少数のベトナム人は、以前にバンコクやノンカイに収容されていた。1980年以降、カンボジアから陸伝いで到着するベトナム難民が移されて、人口は増えた。1981年9月、キャンプ内の難民全員が再定住準備のためパナニコムへ移動させられ、キャンプは空っぽになった。

1981年10月末、シキウは1981年8月15日(ベトナムのボートピープルに対するタイ政府の難民の流入抑止政策が実施されて以降)到着したベトナム難民のための拘留センターとして再開された。これらの難民はタイの海岸伝いに到着し、南部のソククラかタイ湾の東部沿いの地方局で収容された後、シキウに移される。

キャンプの人口は1983年の初めまでにおよそ1万人に増加した。タイ政府は、最初に着いた人々の中で、孤児等社会的に弱い立場の人々の難民の第三国定住許可を決定した。約2,500人がパナニコムへ出発し、1983年8月には、人口8千人程度に減った。援助活動：タイ政府の方針により内務省がキャンプ内で活動を許可しているボランティア団体は、わずかしがなく、公式には教育や社会的プログラムを提供する許可は受けていない。6床ある病院と診療所が、外来患者のために開かれており、重症患者は地方病院に委任される。暴行の被害者のために性病の検診と治療も行なわれている。非公式の教育も難民自身の手によって行なわれている。

\*カオイダン・キャンプでは、CCSDPTの加盟団体ではないが日本の「幼い難民を考える会」が、カンボジア人保育者の養成および保育所の運営、難民の女性のための手工芸(染色・織物)指導を行っている。

## タイ国内の難民キャンプ

### ナコンパノム (拘置センター)

バンナポー ナコンパノム県ムアン地区

管轄：タイ内務省

収容人数：18,372人 ラオス人

位置：バンコクの北755キロ

背景：'77年に開かれた。'82年には他のキャンプからの低地ラオス人を収容するために、ナコンパノムは2万人の収容施設に拡張された。タイ内務省はラオスからの難民たちに、強く本国自主帰還を勧め、ナコンパノムから第三国定住はできないとした。この政策は最近やや緩和され、'83年初めには特別なカテゴリーに属する人々が、第三国定住のためのインタビューを受けることが許された。また、外国のボランティア団体はキャンプ内で活動することができなかったのであるが、その規制もゆるめられた。

環境：住居は長屋になっていて、竹のしきいで20～30世帯に分けられ各10人位ずつが住んでいる。水洗式の公衆便所が家の近くにあり、汚物はポンプでくみ上げられてキャンプの背後にあるため池で浄化される。

援助活動：タイ内務省はいくつかの外国のボランティア団体の活動を許可したが、依然として厳しく制限されている。ごくわずかの人間がキャンプ内で働く事を許されているだけで、その多くは外国のボランティア団体の人間でもタイ人である。

タイの保健省がナコンパノム・キャンプの保健および福祉の責任を負っている。ナコンパノム県の保健当局が、医師・看護婦・助産婦からなるチームをキャンプに送っており、ボランティア団体が機材その他を供給している。

### ウボン (本国自主帰還センター)

ウボンラーチャタニ県

管轄：内務省

収容人員：865人 ('83. 8. 10 現在) ラオス人

位置：バンコクの北東650キロ

背景：'75年開設、南部ラオスからの難民を収容していた。米軍基地の跡地に建てられ、'79年初めのピーク時には37,000人を収容していた。'83年12月に閉鎖され、第三国定住する人々はバナニコムへ、ラオスへ自主帰還する人々はノンカイへ、その他はナコンパノムへ移された。現在はUNHCRによる本国自主帰還計画でラオスへ帰ろうとする人々が住んでい

る。

<救援活動の状況>

必要最低限のサービスが行われており、人々は本国帰還に備えて技能訓練やラオス語・モン語による識字教育を受けている。医療活動はウボン県の保健局によって行われ、ボランティア団体が資金・人材を提供している。

### バンビナイ (避難民センター)

ルーイ県パクチョム地区

人口：36,814人 ラオス山岳民族

位置：バンコク北東640キロ

背景：1975年12月、ラオスのサンコン県からの難民のために開かれた。人口のほとんどはモン族で占められており、1981年から1982年までは、約3万人に安定していたが、バンナムヤオの人々がこのキャンプに移動した1983年中頃から増えはじめた。

援助活動：ボランティア団体は、医療、教育、技術訓練、社会福祉、リクリエーション活動等を提供している。120床ある病院、外来、母子保健クリニック、歯科があり、家族計画、リハビリテーション、結核とライ病患者の治療も行われている。識字教育、教師養成講座も開かれ、自立援助プロジェクトとして、石けん造り、水がめ造り、手縫いやミシン縫い、布織り、大工職、かじ屋、ブリキ業等が行われている。またキャンプ住民と地域のタイ村人のための農業プロジェクトも行われている。モン族のカルチャーセンターは、モンの芸術、音楽、踊りを奨励している。

### チェンカム (拘留センター)

パヤオ県

管轄：タイ内務省

収容人数：3,245人 ラオス山岳民族

位置：バンコクの北821キロ

背景：'76年2月に開設され、山岳民族といくらかの低地ラオス人が住んでいたが、'82年2月、一旦閉鎖された。

しかし間もなく、ラオスから新しく来た山岳民族を収容するために再開され、収容力は約4500人となった。

タイ政府による難民流入抑止政策はこのキャンプでも強調され、本国自主帰還が奨励された。キャンプ内で活動が認められているのは、本国自主帰還プログラム以外では、基本的な医療と公衆衛生活動のみである。

## バンナムヤオ (避難民センター)

ナン県ブア地区

収容人数：11,539人 ラオス山岳民族

位置：バンコクの北785キロ

背景：険しい斜面にあるこのキャンプの人口の大多数はモン族の人々である。'80年、'82年と火災でキャンプが焼け、施設に大きな被害があった。

'82年から'83年にかけて、ソプトゥアンとチェンコンの2つのキャンプの閉鎖、チェンカムの一時的閉鎖により、バンナムヤオの人口は約15,000人に増えた。しかしバンナムヤオも'83年末には閉鎖されることになり、難民たちはバンビナイへ移されている。

## パナニコム (プロセッシング・センター) (トランジット・センター)

チョンブリ県パナニコム地区

管轄：タイ内務省

収容人数：20,323人 カンボジア人・ラオス人・ベトナム人

位置：バンコク南方90km

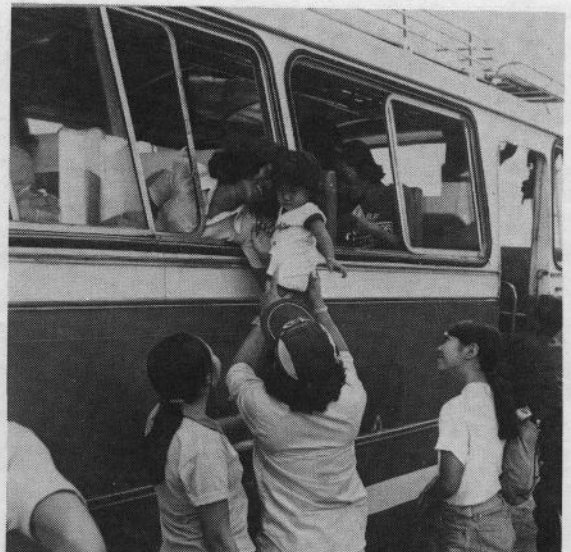
背景：パナニコムはプロセッシングセンターとトランジットセンターに分けられる。双方とも他の難民キャンプと異なり耐久性のある施設として建てられた。

プロセッシングセンターは、カンボジア人のために開設されたが、現在ではベトナム人を除く全ての民族の難民を収容しており、ベトナム人はトランジットセンターの限定された地域に住んでいる。

プロセッシングセンターに入ったからといって、第三国定住が保障されたわけではない。一方トランジットセンターは、第三国への定住を許可された難民たちが移されてくる。1983年初めからはプロセッシングセンターからも、直接飛行場へ行けるようになった。

第三国定住の難民たちは、6ヶ月以上パナニコムにいられないことになっているが、一般に難民たちが第三国に定住するチャンスを確保するために融通をもたせられている。これより長く滞在した難民がキャンプから出された例もある。最近では、400余人のラオス難民がウボン・キャンプへ送られた。内務省はこれらの人々の場合、定住受入国が関心を見せたなら、パナニコムに戻ることを許可するといっている。

環境：収容力は計約3万1千人である。住居は、2～4家族用の小屋で、コンクリートの床、木、波型のカワラ、竹、アスベストの板で作られている。



パナニコムからの旅立ち

水洗式のトイレがキャンプの各所にあり、汚水やゴミはキャンプの外に運ばれ処理されている。

最近建設された池が、主な水源となる。水はキャンプ内の15万キロリットルの貯蔵タンクに汲まれ、ろ過され塩素消毒されてから、配水塔のシステムを通り、配られる。

援助活動：ボランティア団体は、キャンプ住民の基本的な必要を満たす手助けをしている。病院及び外来診察所では、歯科、精神科、母子保健、結核と性病の検診と治療、家族計画を含む広範な医療サービスを提供している。公衆衛生プログラムとしては、補助食供給、保健員による家庭訪問、予防接種、健康教育などがある。救急サービスは24時間体制が組まれている。

カンボジア人の4才～16才の子供には、小学校、中学校教育、他に大人読み書き教室が提供されている。モン語、ミュオン語、ベトナム語のクラスもある。集中的な外国語の訓練、文化オリエンテーション、就職関連プログラムなどが、第三国に定住する難民には提供されている。

ボランティア団体はまた、難民の精神衛生や社会福祉ニーズに応える様々なプログラムを提供している。難民のための便宜やサービスを知らせるインフォメーションセンターがある。その他、専門家が精神療法や定住の相談にのったり、レクリエーションや文化的な施設もある。技能訓練プログラムには、第三国の仕事に関連した電気や機械の組み立てや大工などがあるが、一般に先進国の大量生産や流通の技術に適合するのは難しい。

# タイ・カンボジア国境の難民村 ( )内は人口



## Border Encampments

WFP/UNBRO 資料 '83. 8. 16 現在

\*ただし、ノンチャン難民村の人口は84年1月末現在  
民間団体の活動については、14-15p参照



背景：'79年と'80年には数十万人ものカンボジア人がタイ・カンボジア国境地帯にたどりついた。'79年10月から'80年半ばまでの間、多くのカンボジア人がタイに入ることを許されタイ軍最高司令部の管理のもとにホールディングセンター（一時収容所）に収容された。しかしほとんどの人々は、尚国境の難民村に置かれている。これらの難民村には民間人が住んでいるが、一般にカンボジアの政治勢力や軍隊と結びついている。国境地帯は流動的な状況にあり、軍事的衝突によって、キャンプの設置場所の移動も常に問題となっている。1983年初め、国境の大きなキャンプのひとつノンチャンは、他のキャン

プと同様ベトナム人による攻勢がありキャンプは壊滅した。カンボジア情勢が政治的に解決するまでは、国境地帯が不安定なままで住民が国際的援助に依存することはほぼ明らかであろう。移動が困難な雨期の間、状況が落ち着いていることが望まれるが、国境の状況は流動的であり、明確な地図を描くのは難しい。

初期の難民村の居住者は、食糧や医療をすべて国際援助に依存していた。ユニセフや赤十字国際委員会が緊急の援助物資の供給や活動を委託されていた。タイ国政府と国連、その他の国際機関の間で難民救援活動を実施する責任を分担した結果 UNHCRは国

境地域での活動をしないことになったからだ。

1979年12月、国境に来たカンボジア人に米を配給するという国境を越えた配給システム（ランド・ブリッジ）ができた。その配給地としてタイとカンボジア両方から達しやすく、比較的キャンプ内の状況が把握しやすいノンチャン付近に定められた。このランドブリッジは、米の配給が闇に流れ、国境に人口が定着するのを防ぐために始められた。米の配給は、国際組織やボランティア団体の管理のもとに、受給者に直接手で配給するという方法をとっていた。個々の家族に与えられている多量の米により、彼らがカンボジアに戻れるようにと期待された。1980年3月には計画が拡大され、種もみを配給するようになった。収穫が上がり、カンボジア内の食糧供給が増えたため、ランドブリッジは1981年初め中止された。

**環境：**国境地帯の難民村の状況はタイ国内の難民キャンプに比べ劣っている。その状況やサービスは住民の最低限の必要を満たす程度のもので、さらに多くのカンボジア人を国境地帯に引き戻さぬよう配慮されている。避難所は、住民達によって作られた竹やヤシの葉の小屋である。その材料の一部は、ボランティア団体を通してWFP/UNBROから供給されている。水の供給の多くは、WFP/UNBROによって給水車で運ばれ、難民村内におかれたタンクに貯蔵される。浅い井戸や近くの小川から他に水を得ているところもある。住民達は掘り抜きのトイレを、ビニールシートや帆布と竹わくで囲っている。国境のどの難民村にも下水の設備はない。土地が平坦なため、排水設備は効果的でないことが多い。

**援助活動：**赤十字国際委員会は、従来より行ってきたタイ・カンボジア国境沿いでの活動を徐々に減らし、多くの難民村での医療活動の責任を医療関係の民間救援団体に引き継いできている。

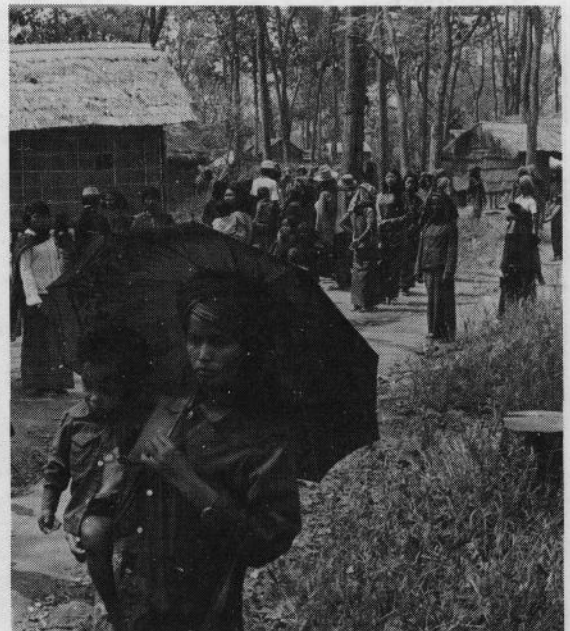
医療上最大の問題は、マラリア、赤痢、回虫の蔓延、そして発熱と地雷創である。診療、治療としては、外科、小児科、産科、結核及びマラリアの治療、免疫、歯科、眼科などがあげられる。これらは各難民村にある診療所（病院）や、外来診察、産科室で血液検査、検尿、検便を通じて行われる。重病患者は、カプチューンキャンプまたはカオイダンキャンプの病院に収容される。ほとんどの難民村で、カンボジア人の医療アシスタント、看護婦、助産婦に

対するトレーニングや教育が実施されている。

ノンサメット難民村では、伝統医療保健センターが健康管理の重要な部分として機能している。又、総合的健康・保健管理の一環として、ボランティア団体の幾つかは、補助食糧供給センターを運営したり、公衆衛生教育を実施している。

ボランティア団体を実施しているその他の援助活動としては、適正技術応用のトレーニング、リハビリテーションや手製の義足製作、総合的農業技術、建築、石けん製造等のトレーニングがあげられる。これら、従来ボランティア団体によって実施されていたものが、現在では各難民村のカンボジア人の行政機関に引き継がれてきている。それらは、教育、福祉など様々な援助活動である。

1982年1月1日より、WFPはUNICEFに代わる国境の管理運営の責任機関としてUNBROを設置した。そこでは食料、水、衣料、避難所の提供その他タイ国軍最高司令部およびその特別部隊の Task Force 80、国際機関、ボランティア団体、カンボジア人の行政組織などと協力してサービスを行っている。ボランティア団体は、配給のモニタリングを補助する。難民村におけるほとんどのサービスは、ボランティア団体を通じてその住民たちに提供される。WFP/UNBROは、いくつかの計画に対する資金提供、ボランティア団体によって行われる活動の調整を行っている。



撮影 前川 誠

民間団体によるタイでの難民救援活動一覧 (CCSDPTメンバー団体のみ)  
(団体名は16～18p.参照)

1983年6月末現在

活動内容	＊キャンプ地	カオイダン	カブチューン	カオラン	クロンヤイ	ソククラ	シキウ	ナコンパノム
郵便・お金の取扱	YWAM					MCC		
建設	COR	JSRC		COERR		MCC	COERR	CCT YWCA
配給	CARE	YWAM	ICA	COERR		CARE CRS	CAMA CARE COERR	CAMA ICA
教育	CONCERN IRC MHD	CRS JSRC YWAM		COERR			COERR	
医療保健・保健教育	CARE CONCERN CRS MHD OHI	CCT COR IRC MSF WYAM	CRS OHI	COERR		CRS	IRFF	CCT OHI SCF
栄養補給	CARE	COR	CRS ICA	COERR		CRS MCC TBM	CAMA	CAMA SCF ICA
レクリエーション	IRC							ICA
第三国定住のための 語学訓練および オリエンテーション								
技能訓練	CEAR COR JVC MHD YWAM	CONCERN CRS JSRC SCF	YWAM		NRC			NRC YWCA
社会福祉	CCT CRS MHD RBT	CONCERN IRC MSF				MCC		
孤児の保護 元調査	CRS			COERR				
給水・公衆衛生	COR	OHI	OHI			MCC	COERR	IRC SCF
本国自主帰還計画								NRC

ラオス	チェンカム	バンナムヤオ	バンビナイ	バナニコム	スアンブルー	国境難民村	タイ被災村
		CAMA		YWAM			
			IRC WCI	COERR YWAM	YWAM	CCT CONCERN COERR	COERR
		CAMA ICA FHI	CAMA FHI ICA	CAMA FHI CRS YWAM	YWAM	CARE CRS IRFF COERR ICA	COERR IRFF NRC
		AFSC AMG CAMA RBT SCF/USA	CAMA CONCERN ICA WVFT COERR ESF SAO	AOG COERR ESF SCF/USA		CARE CONCERN CRS COERR COR YWAM	COERR
SCF	MSF	CAMA MSF OHI TDH	CAMA/CMT CCT CONCERN OHI WCI COERR CRS SCF WVFT	ARC CRS SAWS COERR ESF WCI	TBM	ARC CARE CONCERN CRS MSF SAWS YWAM CAMA/CMT COERR COR JVC OHI SCI	COERR OHI SCF CRS
YWCA		CAMA FHI SAO	CAMA FHI SAO CRS ICA WVFT	CRS SAWS	SAO TBM WVFT	CARE CRS MSF COERR JVC SAWS	COERR TBM
AFSC				COERR CRS SCF/USA	YWAM		
			CAMA	COERR CRS ESF JVC SCF/USA (CONSORTIUM) WSURT YWAM ICRA-T MCC	OMF		
AFSC YWCA		AFSC AMG TOV	CAMA CRS SAO CONCERN FFFM WVFT	COERR ESF SCF/USA YWAM CRS OMF		CEAR CONCERN COERR	TBM CRS
		MSF RBT TOV	COERR CONCERN	AOG CRS COERR OMF	OMF	COERR CRS	
				CRS		CRS	
	IRC	CAMA IRC	IRC WCI	COERR YWAM		CCT SAWS CONCERN YWAM	COERR CRS JVC NRC TBM
AFSC ICA NRC	NRC	NRC	NRC				

## タイで活動する民間団体リスト-1 (CCSDPTのメンバー団体)

略称	名称(本部)	性 格	資 金 源	その他の主な活動地
AFSC	American Friends Service Committee (アメリカ)	1917年設立。クェーカー教。緊急援助、開発、自立促進、正義と平等、平和をめざす。	一般	カンボジア、ラオス、中東、アフリカ等 17カ国
AMG	Advancing the Ministries of the Gospel (アメリカ)	1942年、ギリシャの福音伝道の組織が前身。伝道が主な活動だが、保健衛生、児童福祉にも力を入れている。	欧米諸国からの寄付	インド、インドネシア、グアテマラ、ハイチ他
AOG	Assemblies of God Foundation (アメリカ)	119ヶ国に点在する伝道者1400名の組織。伝道活動に加えて救援、福祉活動も行っている。	アメリカ各地の教会	
ARC	American Refugee Committee (アメリカ)	1979年設立。非宗教、非営利団体。インドシナ難民のアメリカ定住への援助やタイの難民キャンプへの医療チーム派遣など。	一般、企業財団、国連機関等	
CAMA	Christian and Missionary Alliance Organization Services, Inc. (アメリカ)	1911年ベトナムでの伝道活動を開始、カンボジア、ラオス、タイにも。プロテスタント。インドシナ戦争以後、救援活動。	欧米諸国の教会	40ヶ国
CARE	Co-operative for American Relief Everywhere, Inc. (アメリカ)	非宗教、非政治的、世界でも屈指のNGO。36ヶ国にて開発、救援活動に従事。タイでは1979年から、栄養、教育、衛生、農業協力。	一般、国連機関、各国政府他	36ヶ国
CCT	The Church of Christ in Thailand (タイ)	1828年プロテスタント宣教師がタイに着き、以来学校、病院の建設などの開発、福祉活動を行い、1975年よりラオス難民の救援。	World Council of Churches	
CEAR	Comite' Europeen D'Aide Aux Réfugiés (フランス)	47のヨーロッパの団体の連合。1980年、カンボジア人への救援のため設立。農業、日常生活に必要な中間技術の訓練。	ヨーロッパ共同体、国連、一般	ソマリア、スーダン
COERR	Catholic Office for Emergency Relief and Refugees (タイ)	1979年より、タイのカトリック司教会議によって、難民、自然災害の被災民、難民流入によるタイの被災村民への緊急援助。(日本のカリタス・ジャパン、上智大と提携)	タイカトリック司教会議、カリタス、一般、	
CONCERN	Concern (アイルランド)	ビアフラ戦争の被災者救援をきっかけに設立された。開発の専門家派遣による援助活動を行っている。	一般、アイルランド政府他	バングラデシュ、タンザニア、エチオピア
COR	Christian Outreach (イギリス)	1967年ベトナム孤児救援のため活動開始。児童福祉に力を入れているが、母子保健診療、技術訓練、建築、補助食糧配給も。	一般、教会学校、イギリス政府、国連機関、	フィリピン、イギリス
CRS	Catholic Relief Services (アメリカ)	アメリカのカトリック教会による国際的緊急救援、開発援助団体。食糧、医療、教育など各分野の活動を行っている。	EEC、欧米諸国政府や民間団体	
ESF	Ecdes San Frontières (フランス)	フランスに定住する難民の語学研修、生活指導を目的として1980年活動開始。ラオス山岳民族のためラオス語モン語教育も。	一般、フランス政府、民間団体、	マレーシア、インドネシア、シンガポール

## タイで活動する民間団体 — 2

略 称	名 称(本 部)	性 格	資 金 源	その他の主な活動地
FFFM	Finnish Free Foreign Mission (フィンランド)	50年前、外国への宣教師派遣と、伝道を目的として設立。タイでは、織物プロジェクトや毛布、靴等の物資配給。	キリスト教徒	日本、インド、ケニア、ウルグアイ他
FHI	Food for the Hungry International (スイス)	第三世界の人々のニーズを世界に伝え、緊急援助、開発援助を草の根レベルで行うことを目的とする。	一般、教会 国連や政府 機関	バングラデシュ、ケニア、ソマリア、リベリア、ガーナ、ボリビア、ペルー等
ICA	International Christian Aid (アメリカ)	福音伝道派教会系。食糧、衣類、医薬品の支給。	一般	ケニア、パキスタン、ボルトガル、ソマリア、ウガンダ
ICMC	International Catholic Migration Commission (スイス)	1951年設立。難民が第三国へ定住する際に、旅費の貸付、家族再会、受入国の準備を促すなどの手助けをしている。	一般、欧米 諸国政府や 民間団体	48ヶ国
ICRA-T	Indo-China Refugee Association - Thailand (オーストラリア)	オーストラリアへ定住する難民たちのオリエンテーションなどを行っている。	オーストラ リア政府	オーストラリア
IRC	International Rescue Committee (アメリカ)	1933年、アインシュタインの提唱で、ヒトラー政権からの難民を救援したのがきっかけ。緊急援助、第三国定住の際の援助等。	一般、企業 アメリカ政 府、国連機 関、民間団 体	欧米諸国、香港、レバノン、スーダン、メキシコ等
IRFF	International Relief Friendship Foundation (アメリカ)	貧困や災害に苦しむ人々への資金、物資援助。タイではベトナム難民への医療、スラムの共同体開発等。(日本の、平和医学アカデミーが医療スタッフを派遣)	教会、民間 団体、一般	ザール、ザンビア、ペルー、ジャマイカ、ハイチ他
JSRC	Japan Sotoshu Relief Commiffee (日本)	1980年曹洞宗禅僧により開設、カンボジア文化、文書の保存、教育などの文化的事業活動。(=曹洞宗ボランティア会)	一般、民間 団体	
JVC	Japan International Volunteer Center (日本)	(32p. JVC プロジェクト表参照)		
MCC	Mennonite Central Committee (アメリカ)	1920年より海外活動。現在750人のワーカーが各国で活動中。タイではカナダへ定住する難民へオリエンテーションをしている。	メノナイト 派教会	アメリカ、カナダ、その他42ヶ国
MHD	Malteser-Hilfslendienst E. V. (西ドイツ)	ローマカトリック教会付属。タイではライ病、その他の皮膚病にかかった難民などの医療、リハビリ、技術訓練など。	カリタス等 の民間団体、 一般	パキスタン、インド、ソマリア、イタリア、ユーゴ、ガーナ他
MSF	Médecins Sans Frontières (フランス)	医療専門家たちによる。難民や自然災害の被災者に医療サービスを提供している。	一般	アフガニスタン、チャド、エリトリア、レバノン、ジンバブエ他
NRC	Norwegian Refugee Council (ノルウェー)	ノルウェー赤十字、レッドバーナなど、20の民間団体によって構成され、各地の難民救援活動に携わっている。	一般、ノル ウェー政府	各地
OHI	Operation Handicap International (フランス)	1982年設立、インドシナ難民やタイの村民たちの障害者対象。義肢作成の訓練、リハビリなどにより彼らの自立促進が目的。	一般、民間 団体、国際 機関など	カンボジア チャド(企画中) ラオス(企画中)

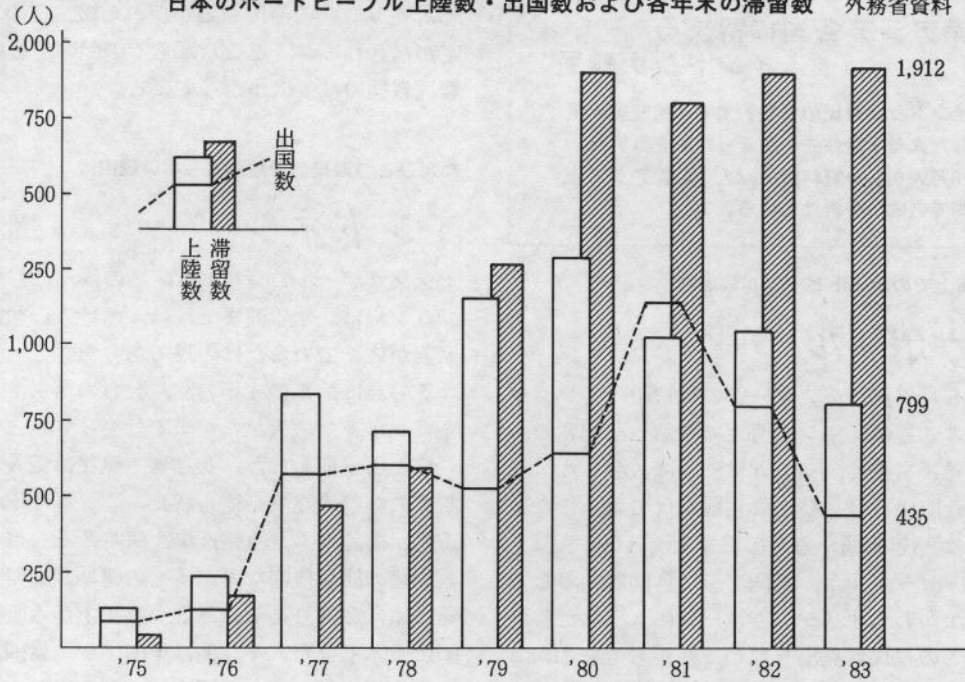
タイで活動する民間団体 — 3

略称	名称(本部)	性 格	資 金 源	その他の主な活動地
OMF	Overseas Missionary Fellowship (シンガポール)	東南アジアでの布教。医療活動。	(一般)寄付	アセアン諸国、台湾、韓国他
RBT	Redd Barna (Thailand) (ノルウェー)	緊急援助、コミュニティー開発を通しての児童福祉が目的。	一般	アジア、アフリカの24ヶ国
SAO	Southeast Asian Outreach (イギリス)	カンボジア難民援助及びイギリスに定住する難民の援助。	一般	イギリス、フランス
SAWS	Seventh-Day Adventist World Service (アメリカ)	セブンス・デイ・アドベントリスト教会の組織。宗派に関係なく各国への援助を行っている。	教会、アメリカ政府、一般	各国
SCF	The Save the Children Fund (イギリス)	国連児童宣言に基づいて、各国の児童福祉活動を行っている。	イギリス連邦諸国	各国
SCF/USA	Save the Children Federation(アメリカ)	児童福祉を目的とする開発援助団体。タイでは家族捜し、教育、語学訓練など。	一般、財団政府	30ヶ国
SOS/ESF	SOS Enfants Sans Frontières (フランス)	1974年設立。児童対象の非宗教的、非政治的団体。食糧配給、医療、教育など。タイではOHIと協力。	一般	エジプト、チュニジア、マダガスカル南アフリカ他
TBM	Thailand Baptist Mission (アメリカ)	伝道及び医療、教育、福祉などの援助を行うバプティストの組織。	バプティスト教会、一般	94ヶ国
TDH	Tom Dooley Heritage, Inc. (アメリカ)	1950年代、東南アジアで活躍した故トム・ドゥーリー医師をちなんで1970年に設立。医療、保健活動を行っている。	一般、企業	
TOV	The Ockenden Venture (アメリカ)	1955年設立。イギリスに定住する難民及び海外の難民援助。教育、職業訓練などの長期的自立促進プロジェクトに重点。	一般、イギリス政府、民間団体	
WCI	World Concern International (アメリカ)	1973年設立。緊急援助や自立促進援助を専門とするキリスト教組織。タイでは食糧援助、水供給、保健衛生や農村開発など。	一般、教会	25ヶ国
WSURT	Welfare Services Unit for Refugees in Thailand(アメリカ)	1936年設立。個人の自立援助。末日聖徒イエスキリスト教の団体	一般、教会	香港
WVFT	World Vision(Foundation of Thailand) (アメリカ)	世界各国のキリスト教組織を通して活動中。そのタイ支部。	欧米諸国の企業、一般	45ヶ国
YMCA	Young Men's Christian Association (スイス)	125年の歴史を持つキリスト教組織。タイでは1975年より難民救援活動。	世界YMCA同盟(含日本)	15ヶ国で難民救援
YWAM	Youth With a Mission Relief Services (スイス)	1960年設立。キリスト教組織。緊急援助、教育、開発援助、農業、医療プログラムなど。タイでは医療、食糧、職業訓練。	YWAM支部、一般、教会他	ヶ国
YWCA	Young Women's Christian Association (スイス)	1947年設立。キリスト教組織。タイでは設立当初から様々な活動をしてきた。1975年からキャンプで織物学校など。	各国YMCA	各国

\* CCSDPT 加盟団体ではないが、日本の「インドシナ難民を助ける会」が、人材・資金を供給している。

# 資料・日本国内のインドシナ難民

日本のボートピープル上陸数・出国数および各年末の滞留数 外務省資料



## 日本国内のインドシナ難民 1984年1月末現在

一時滞在者(ベトナム人)	1,911
大和定住センター	102
姫路 "	103
品川国際救援センター	324
定住者	
カンボジア人	552
ラオス人	580
ベトナム人	1,788
定住者小計	2,920
合計	5,360 人

外務省アジア局 難民対策室資料

## 職種別就職状況

( )は女子

職 種	計
機械工	131(14)人
熔接工	73(13)
電気製品・機械組立工	64(22)
縫製工	33(20)
プラスチック加工員	26(4)
ウェ이터・ウェイトレス	25(12)
工場雑務員	24(14)
コック見習	21(5)
自動車整備・エンジン修理工	21(0)
その他	435(125)
計	853(229)

## 企業規模別就職状況

( )は女子

従業員数	計
5人以下	(111社)149人
6人以上～29人以下	(128社)252
30人以上～99人以下	(99社)237
100人以上～299人以下	(42社)164
300人以上～999人以下	(15社)42
1,000人以上	(5社)9
計	(400社)853

アジア福祉教育財団「あなたの愛の手を」

1984.1, 第7号より

## “仮り住い”の16万人 東南アジア各国に留まる インドシナ難民

インドシナ難民のうち、すでに第三国へ定住した人々・定住先の決まった人を除いた、約16万人(3 p.資料参照)が、東南アジア他各国で仮住いを続けている。

減少する海上でのボートピープル救助数

### シンガポール

1983年5月17日、デンマークの貨物船、アンデルス・マースク号は、南シナ海上で救助した54名のベトナム人難民を乗せ、シンガポールに入港した。それを知った関係者は、ひとまず胸をなでおろした。というのは'83年初頭からその日まで、3,000人以上のボート・ピープルが、東南アジア各国に到着していたにもかかわらず、シンガポールに入港した船からは、1人の難民も見出せなかったからである。

シンガポールへは、'81年には90隻の船舶によって5,535人の難民が到着したが、'82年には60隻、2,749人に減少した。さらに、'79年、'80年にはめざましい実績をあげたいくつかの国の船では、'81年、'82年には、救助したという話を聞かなくなってしまった。それらの国では、同時に難民の受け入れ数も減少した。

アンデルス・マースク号から下船した難民は、3日4晩海上にあったと言う。その間、彼らは6隻の船と出会い、そのなかの1隻は、わずか300メートルの距離ですれ違ったと主張している。旗もなく、灯火もなかったため、すべての船が40メートルのボートに気がついたとはいいきれないが……。

1隻の船でも、難民の訴えを無視したとすれば憂慮すべきことではあるが、今回のできごとが最悪というわけではない。これまで、20隻、30隻の船に見過ごされたと言う難民もいるからである。

以前から懸念されていたとおり、季節風の風向き、船会社の不況、ベトナムからの出国数の減少などの要因によって、シンガポールに到着する難民は減少すると推測されている。

このような状況のもと、ホーキンズロード難民キャンプの人口は、ここ数年の最低に落ちこんでいる。インドネシアから第三国に向かう「通過者」を除け

ば、難民は100人に達していない。

このため、新工業地帯の一面に存在するホーキンズロードキャンプは、再開発の話も持ち上がっている。キャンプの借用期限が切れた後、どのような決定がなされるか、ここしばらくの間の、船舶による難民救援の多少にかかっている。

ただひとつ難民の漂着が減らない理由は

### インドネシア

シンガポールの南リアウ諸島のほんのちいさな島ガララン島は、4年前まで、ほんの数人の漁師とその家族が住んでいるだけの島であった。

この島に、この4年の間、数万のボートピープルとカンボジアの人たちが来ては去っていった。

ほとんど何もなかった島は、難民の受入れのため、多くの施設の建設を迫られた。コンクリートの埠頭、道路、橋、ダム、水処理場、病院、そしてもちろん難民達の簡易住宅など、多くの建物が必要であった。難民には2通りある。ひとつは海上から直接、この国にやってきた人々。他は東南アジア諸国から、定住する第三国に向かう経由地として来た人々である。

ガララン島にはふたつのキャンプが開かれたが、81年に開かれた第二のキャンプは、フィリピンのバターンと同様に、定住手続専門のキャンプである。

大きな危機は、すでに去った。1979年には、50,000人もの難民が波のように押し寄せたが、その再現はない。定住受入国の驚くべき努力によって、'79年、'80年に到着した難民のすべては、インドネシアを離れた。今、ガララン島には、'82年に到着した17,000人のうちの半数がいる(83年4月現在)。

他のアジア諸国と同様に、最近では難民の滞在が長期化している。難民定住受入国の変化によるものだが、難民達は新生活を開始するために、6カ月から1年も待つことを強いられている。また一部の者にとっては、状況が変わらなければインドネシアを去るチャンスもない。

このような状況にもかかわらず、他の地域では大幅に減っているボートピープルの到着数が、インドネシアではあまり減っていない。ベトナムからインドネシア領域への航海距離は、タイあるいはマレーシアまでとほとんど変わらない。インドネシアの海域では海賊が出ないためもある。

難民志望者のなかで、ガララン島の暖かい受け入れに定評があるのだろうか。広く風通しのよい居住空

間、蛋白質に富んだ食事、乾期を除いて豊富な水、24時間体制の医療サービス、教室、職業訓練、体育館、映画館、テレビ、それにヤシの樹蔭の広い砂浜もある。

もちろん、いろいろ規制もあるが、管理は控えめだ。夜、灯が消えるまで、住民は通りに出て物売りや、テレビや、最新のポップミュージックを流して豆乳や砂糖きびジュースを出すカフェを取り囲んでいる。そこは、過去と未来の長い人生の間の、短い旅の宿なのである。

ボートピープルの着くアナンバス、ナツナス両諸島とここガラン島の間は、トゥグー・ムリア号が往復している。この船は船倉を難民移送用に改造した600トンの元貨物船で、4～6月、10～11月が活動期だ。季節風に乗って増え、そして減る。季節風のリズムに従っている。それがいつまで続くのか、誰にも分からない。

パラワン — 7,000人のボートピープルの住む小島

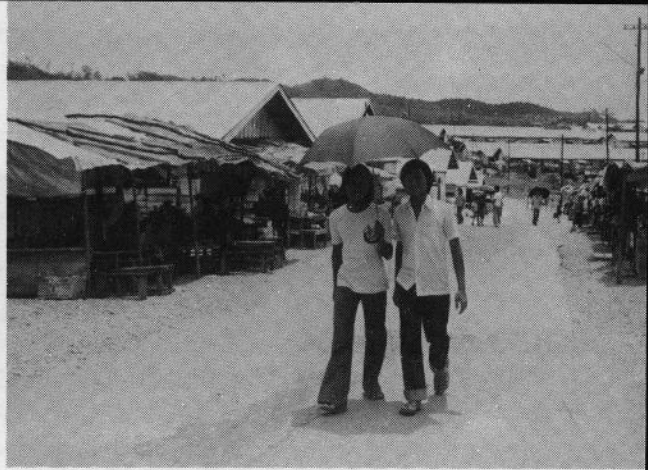
## フィリピン

強い日射しにヤシの樹蔭、寄せ返す波…。なんの変哲もない島に、ポツンポツンとヤシの葉でふいた小屋が姿を現わしたかと思うと、みるみるうちに人口が増加し、小屋は軒を並べるようになった。7,000あまりあるフィリピンの島のひとつ、パラワン島は難民の収容施設になって、めざましく変わった。81年2月には2,500人、1年後には7,500人に増加し、さらに1年後には4,500人に落ちついている。

全世界のどのキャンプでも見られるように、キャンプでの生活は時間がたつにつれて、一見、「正常」になってくる。ベトナム人の社会はがっちりとした構造である。様々な個人が才能と能力を使い、自分の職業を営み始める。活気があふれ、社会としてのルールが生まれ、安定した様子を見せるようになる。

このキャンプでは、過去2年間、OHFOM(マルテズ派フランス病院事業組織)という団体が、医療センターを担当している。そのなかの1人、栄養学、小児科専攻の女性、マリー・ドゥ・ボーコル医学博士の話を紹介しよう。

「私は3週間かかって、キャンプ中を歩きました。一軒一軒訪問して、住民にどんな必要があるか知るためです。地区によって疥癬(かいせん)が8割もの感染率を示しています。そのほか、多くの人が栄養失調で苦しんでいるのを発見しました。大人でも



子どもでも、キャンプの通りを歩いている姿を見るだけでは、健康に暮らしているように見えます。

しかし、家の中をのぞくと、病気の子どもたちがいるのです。ベトナム人たちは、世間体を重んじるのか、病気の子を家の外に出したがりません。私が見た子どもの多くは、1～3歳で、もう長い期間、つまり故国にいるときからの栄養失調が現われていました。ボートの中での2～3週間の空腹状態が、さらに悪化させたケースも多くありました。」

この状況に対処するため、ボーコル博士は団体の本部に頼んで、1トンの粉ミルクを届けさせた。まず乳児のため、次には1～4歳の幼児のために給食センターを設立した。

「ボートでは食料はもちろん、水が不足しています。20日の間、1人1日大サジ3杯の水しかない例もよくあります。強い直射日光をさえぎるものもなく…」

女史がそう語る間にも、新たな難民たちが到着した。新来のグループが着くと、キャンプの難民全員が港に集まる。親戚のものはいないか、家族のたよりを知るものはいないか、と探しているのだ、ときおり、体を揺さぶり、涙を流し、絶叫しながら抱きあう人たちがいる。再会できた家族たちだ。

保護者のいない若年者の問題に力点

## マレーシア

マレーシアは、インドシナからのボート・ピープルを、いちばん多く上陸させた国である。その総人数は、1983年3月末現在で182,687人に達している。

この国に到着した難民は、東海岸の小島、ブラウ・ビドンに収容される。第三国に定住が決定した人々は、首都クアラ・ランプール近くのスガイ・ブシイ・トランジット・センターで、出国前の一定期間を過ごすことになる。1983年3月末現在、恒久的解決を待つ人の数は、8,754人にのぼっている。

マレーシアにも各国共通の悩みが存在するが、ここでは、低年齢の難民の問題について述べよう。

近年、マレーシアに到着するベトナム人難民のなかには、多数の孤児や、単独の未成年の男女が含まれている。ご存知の通り、難民を受け入れる第三国は、その条件を厳しくしつつある。未熟練労働者や専門を持たない人々の受け入れ枠は狭い。その結果、難民のキャンプ滞在は長びく傾向がある。こういった状況をモロに受けるのが、保護者のいない低年齢の難民なのである。

そのため、UNHCRと活動のパートナーであるマレーシア赤新月社（赤十字社に相当する）は、多くの団体の援助を受けながら、対策を進めつつある。

キャンプでは、孤児たちには宿舎が一棟、割り当てられている。その建物は「アムコ」（ベトナム語で女王の意）と名づけられているが、6つの部屋がある。各室にはベトナム人の大人が、指導者としてついている。

このほかにも、約100人ほどの孤児が、他の家族や一時的な保護者と一緒に暮らしている。民間団体のスタッフも、これら少年少女を定期的に訪問している。

ベトナムにおいて、何らかの職業的訓練を受けた場合は、その仕事を続けるように指導される。

孤独なため彼らは心配や不安にかられている。受け入れてほしいと希望しているにもかかわらず、定住国からの拒否にあって失望させられている。

キャンプで教育される外国語では、一応英語が最重要視されているが、必要に応じて、仏語も教えられている。これからは、職業訓練がさらに促進させられる予定である。それこそが、受け入れ第三国が難民に求めるもののひとつであるからである。

#### 約26万人のベトナム難民

### 中国（中華人民共和国）

1978年、春から夏にかけてのわずかの間に、25万を超すベトナム難民（9割が中国系）が、陸の国境線を超え、中国に流入した。中国では、ほんの短いあいだ一時キャンプに置くだけで、すぐさま、雲南、広西、広東、福建各省にある150カ所の国営農場と漁業区に送り、難民の定住化をすすめている。難民のほとんどが広東語（中国の地方語のひとつ）を話せるため、一見定住はスムーズに進んでいるように見えた。しかし、中国の一係官は言う。



香港のクローズド・キャンプ

撮影 小林正典

「難民の多くは、港湾と炭坑の労働者だが、中国でも人手は足りている。しかも、中国の水準から見ると、大体が未熟練工ばかりである」

難民の定住地のひとつターワン国営農場は1978年夏に6,307名の難民が到着したときには、13,000人の住民を擁していた。その副長氏は語る。

「文字通り一夜にして、人口が5割も増加し、家屋も食糧も教育施設も不足している。難民の3分の2は、いまだに仮設家屋に住んでいる。以前は、この農場で自給できていたが、現在年間800トンの米、食用油、日用品を国からもらっている」

同農場では農地を開拓し、養鶏、養豚を拡大する予定であるが、自給を達成するには、ここ数年かかるであろう。

難民問題をきっかけに、UNHCRは北京に事務所を開設し、援助を開始した。現在、漁師難民11,000人と、農夫難民39,000人に対する自立プロジェクトを進める一方、10万人に住宅を与えるため、約4,100万ドルの援助を行なっている。

中国における難民定住化は、一応成功しつつあると見なされている。しかし、都市住民を中心とする難民の一部は、農村生活や国営農場の現状に順応できず、先進国への定住を希望した。そのため、'79年から'81年にかけて、数千の人々が香港、マカオに越境していった。しかし、香港、マカオの収容力にも限界があり、受け入れ第三国も、東南アジアに一時避難しているだけの難民を、まがりなりにも中国に「定住」した人々よりも優先する方針である。そのため、越境者の多くは中国に送還された。

中国から例外的に外国への定住のチャンスを与えられているのは、家族再会のケースと海上で救助されて中国に上陸したケースだけである。

過去5年間に中国がインドシナ難民のために支出した金額は2億ドルに達する。

## 香 港

香港のかかえる難民問題は、本質的には他の諸国と変わりがない。しかし、国際都市香港は、移民難民の都市でもあるため、他には見られない特徴もある。その最大のものはオープン（開放）キャンプである。

このキャンプは難民たちが出入りが自由で、働ける者は、どんどん生活費を稼いでくる。身分証明書さえあれば、ほぼ一般市民と同じような生活ができるわけだ。現在ではキャンプの90パーセント以上の人が、食事代を自分たちでまかなっている。

このように、香港は難民たちにとって“住みよい土地”であり、多くの難民が香港を目指してきた。それが暗転したのは、他の諸国と同じように、1982年来の第三国の受け入れ枠の減少によるものである。

元来、香港には中国大陸からの難民が流入し続けていた。その上に、ポート・ピープル、さらには、陸路中国に避難したベトナム難民の流入が重なってしまった。第三国が難民を受け入れている間は、それでも順調だったが、受け入れが止まると同時に、難民があふれてしまった。そのため、1982年7月以

降に到着した難民は、鉄条網で囲まれたクローズド（閉鎖）キャンプに入らざるを得なくなった。中国からの難民は「不法入国者」として送り返している。

現在、香港にはふたつのオープンキャンプがあるが、そのひとつは、一度閉鎖されてまた再開された経歴を持つ。それは、1982年、日ごろの不満が爆発して、南北に分かれたベトナム人の喧嘩が広がり、10,000人の警官が出動する大きな暴動になったためだ。現在一方には、ベトナム系を中心とした南ベトナムからの人々。他方には、北ベトナムからの人々と中国系の人々が収容されている。

こうした結果、「ジュビリー」というキャンプには女性の3倍もの男性がおり、欲求不満の原因にもなっている。また、このキャンプはキリスト教の団体が運営しているので、避妊プログラムを組んでいないため、出生率が地元の香港の3倍にもなったことがある。これも、難民の人口増加に一役買っている。それに加えて、農村出身者が多く、また一夫多妻制が残っているため、第三国定住の際の障害になっている。ジュビリーキャンプには、日本に親戚がある家族が数組いたが、なかなか定住許可がおりないという。

（香港については、'83年8月、堀 明子の現地レポートによる）

## 海賊との闘い

ポート・ピープルの小舟を襲撃する海賊が出没するのは、南シナ海とシャム湾である。海賊はタイやマレーシアへ脱出しようとするベトナム難民を何度も攻撃し、金品を奪い、暴行を加え、生命まで奪うこともまれではない。

以前から、この海域には海賊が存在したが、1979年に最高潮となったベトナム人の海路脱出とともに、恐ろしく高い発生率に達した。

'79年にUNHCRは同執行委員会、国連総会、事務総長、国際海事機構（IMO）にこの問題を提示した。

'80年5月初旬、UNHCRはタイ政府に、危険地域監視用の非武装高速巡視船を一隻供与した。同時期にいくつかの人道主義にもとづく団体が、ポート・ピープル救援のために、東南アジアへ船舶を送り出し始めた。

'81年、タイ政府はアメリカから援助された資金で、一帯の海と空からの監視を開始した。しかし、資金が切れた9月、監視は中断された。UNHCRが、12カ国から3,600万ドルの資金を集め、タイ政府に監

視の再開を促した結果、'82年7月に再開された。

この効果は、目に見えて現われ始めた。襲撃は2割方減り、83年3月には、殺人、強姦、誘拐が0を記録した。到着した難民は「海賊たちは飛行機が近づくと逃げ出した」と語っている。飛行機2機は、毎日4時間、一帯を飛び回っている。

1年間の予定で実行されたこのプログラムも、UNHCR、タイ国政府、12カ国の援助国政府の協力で、83年7月以降も継続されることになった。

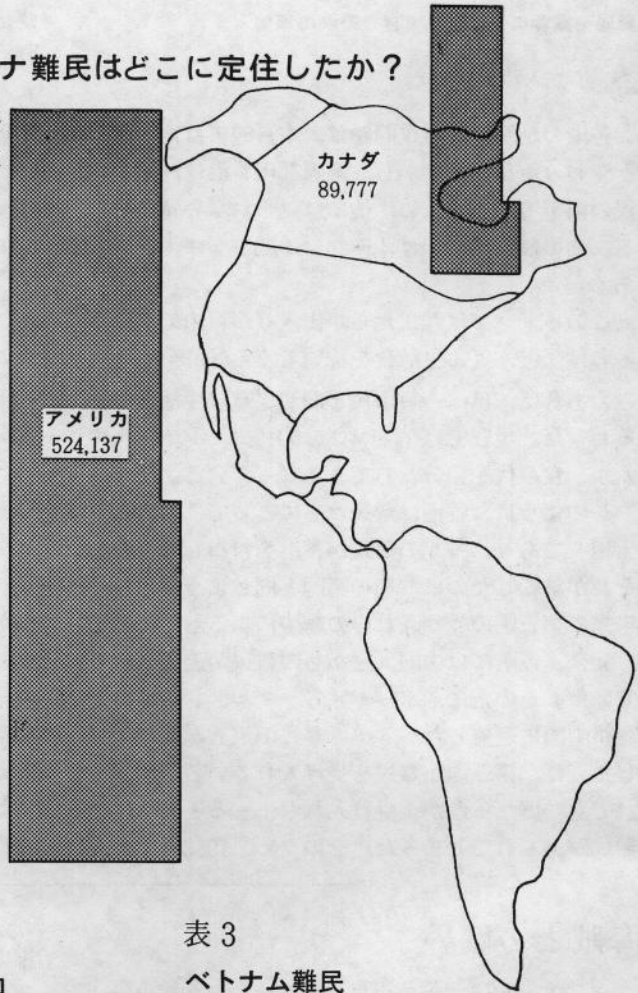
巡視活動の整備に必要な額は200～300万ドルであろう。この額があれば、3機めの飛行機の購入も可能である。

こうした対策と同時に、UNHCRは、被害を受けた難民による、海賊に対する法的な訴訟も援助している。現在のところ、告発されたり逮捕された漁民は53人。そのうち27名が公判にかけられ、最高25年の禁固を含む重刑に処されている。しかし、訴えの件数は、被害の多さにくらべると、きわめて少ない。報復を恐れたり、長引く裁判で定住国への出発が遅れるのを懸念する難民が多いからだ。

# 統計資料でみる インドシナ難民

表1  
インドシナ難民はどこに定住したか？

UNHCR 資料  
83 年末現在



'83年12月1か月間の合法出国者数は2,000人（うちカンボジア人18人）となり、'77年以来始めて千人を下回り967人となったポートビープルの到着数の2倍以上となった。（UNHCR バンコクの Bulletin より）

表2  
タイにおける各年末の難民キャンプ人口

=前年の滞留数+その年の流入数-その年の出国数  
CCSDPT 資料

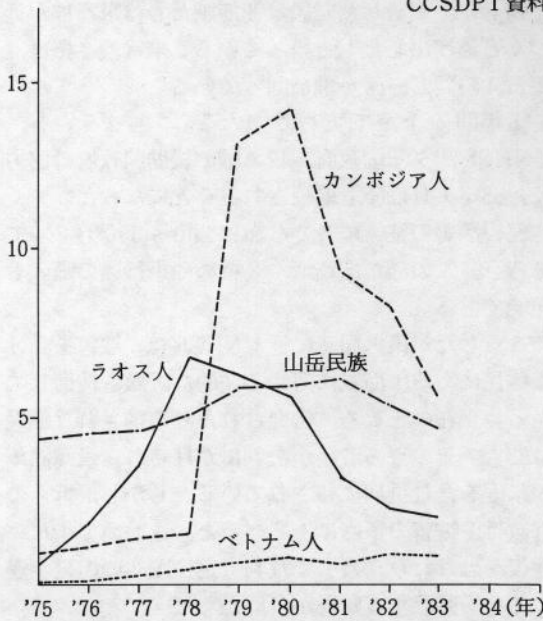
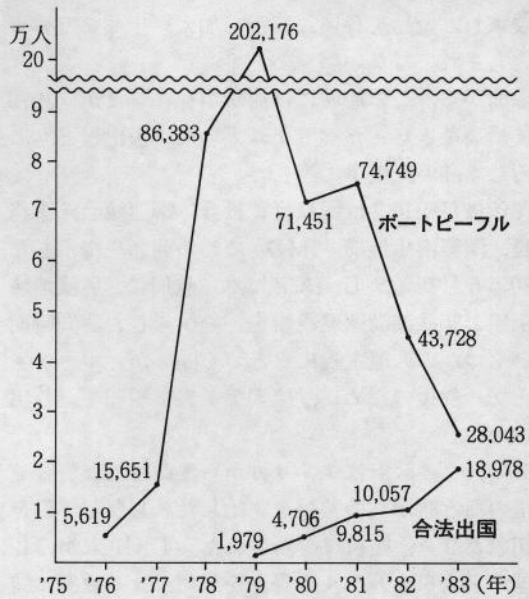


表3  
ベトナム難民

ポートビープルと合法出国  
UNHCR 資料



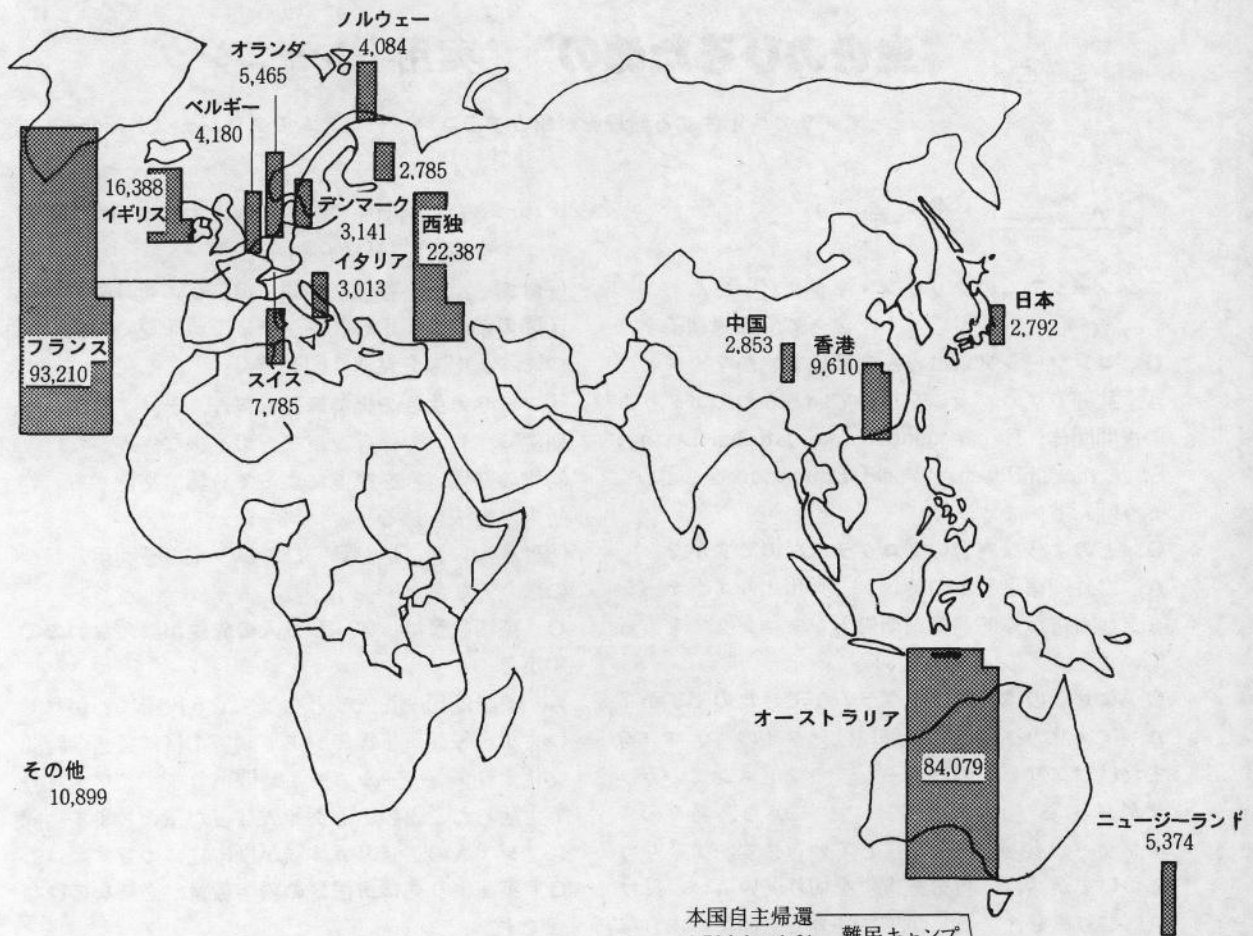
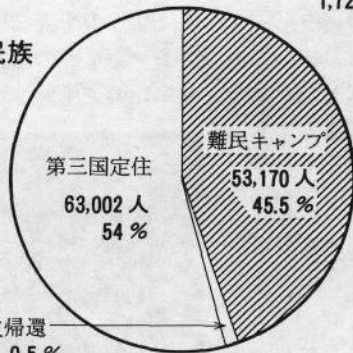


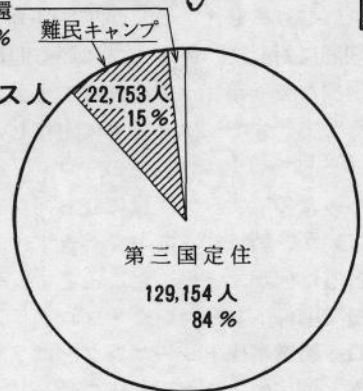
表4  
タイに流入したインド  
シナ難民は今、どうい  
う状態にあるか？

'75年から、'83年4月末まで  
CCSDPT 資料

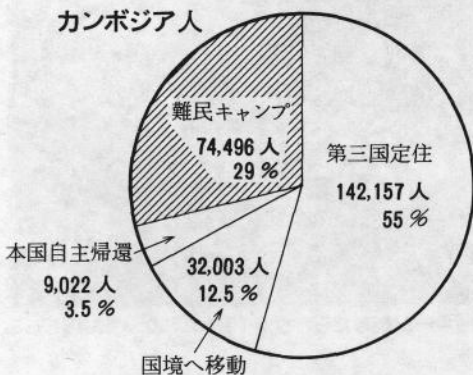
山岳民族



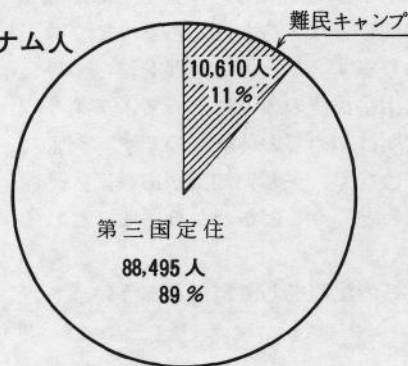
ラオス人



カンボジア人



ベトナム人





# “生きのびるための” 実用トレーニング

アメリカへ定住する難民を対象とするコンソーシアムのプロジェクト紹介



コンソーシアムのマリリン・ギレスピーさん

ききて 深津高子

Q. コンソーシアムはどんな団体ですか？

A. 共同でプログラムを行っている3つのアメリカの民間団体, Experiment in International Living, Save the Children, World Education をまとめてそう呼んでいます。

Q. どのような内容のプログラムなのですか？

A. “外国語としての英語” “文化オリエンテーション” と併行して “職業準備トレーニング” を行っています。

Q. なぜこのようなプログラムができたのですか？

A. アメリカへ定住する難民は、タイのパナニコムまたはフィリピンのパターン、インドネシアのガラン島にあるプロセッシングセンターから、各々のスポンサーのもとに直接定住していきます。アメリカについてからは、自分で人生を切り開いていかなければなりません。彼らがアメリカで直面するような問題に対して、キャンプにいる間にできるような実用的なカリキュラムを作ることが必要になりました。そこで、すでにアメリカに定住した難民にインタビューしてパナニコムでのプロジェクトを評価してもらったのです。何が役に立ち何が必要で何がそうでないか、特に知っておくべきアメリカ社会での風習習慣は何か、といったことです。そこで出来たのが職業準備トレーニング・プログラムです。

Q. 職業準備トレーニングとは？

A. 難民の人達が手や体を動かして作業をしながら物の名前や道具の使い方などをおぼえるようにプログラムが立ててあります。ことばと実践を結びつけるわけです。特に山岳民族の人々にとって、アメリカのような機械文明は初めての体験なのです。例えば、電気は魔法ではなく、正しい知識があれば、恐ろしいものではないということがわかります。これは6つに分かれています。

①電気 簡単な電灯の配線をして電気がどういふものか発見する。

②物づくり 図面を書いて実際に木の本棚をつくる。ミシンを使って縫い物をする。

③計測 重さ、容積、時間、温度などを身につける。

④図の読み方 定規、コンパスで線をひいて紙箱をつくる。地図や見取り図を書く。

⑤アメリカ生活の模擬練習 料理、テーブルの準備、皿洗い、食品の保存、車などの簡単な修理。

⑥物の整理 物を機能によって分類、整理する。判断力と方法を知る。

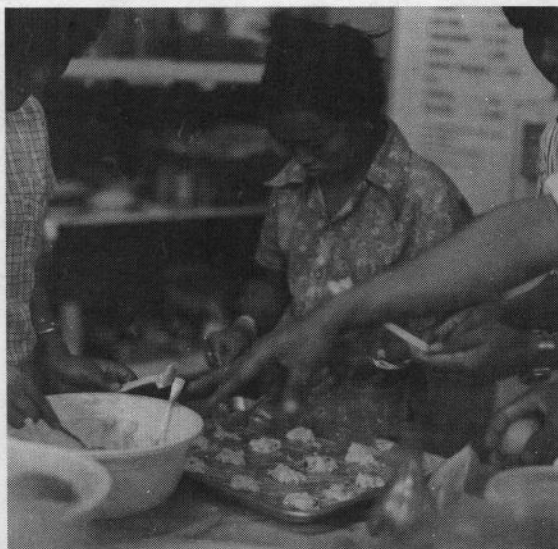
⑦計算 算数(足し算、ひき算)電卓を利用、お金の数え方など。

Q. 英語教育は、アメリカ人の先生が教えないのですか？

A. 英語は10~20人ひとクラスで5段階にわかれています。午前、午後のシフト制で1日に英語3時間文化オリエンテーション1時間あります。アメリカで生活したことのあるタイ人などが指導します。同じアジア人のアメリカ体験が役に立つのです。

Q. 英語より先に母国語の識字教育が必要なのはなぜですか。

A. 私達の研究結果では、特に山岳民族の場合、まずモン語などの読み書きをおぼえた方が英語の上達も早いのです。



クッキーが焼けたら、ウェイトレスになってお店ごっこ

## 「仲間への手紙」

——アメリカへ来てみたら

「アメリカに着いて3か月になります。アメリカの印象は何といっても寒さです。気候のせいばかりではありません。この国の人々の心も冷えきっているようです。タイの難民キャンプにいた笑顔で優しいアメリカ人とは、とても同じとは思えません。

アメリカでは“時は金なり”で、彼らはあなたとおしゃべりをして、時間をムダにしようとは思わないでしょう。友達を見つけるのは難しいです。私は休日より、働いている時が好きです。お金を稼ぎたいからというより、働いていると考える暇もなく、落ち込まなくてすみます。

タイではアメリカを天国のように想像していましたが、着いた最初の日から、それがはかない夢であったと思い知らされました。クリスマスはアメリカ人にとっては最大の楽しみなのですが、キリスト教徒でない私には関係がありません。クリスマスの日、私はカンボジアで友達や家族と暮した日々を思い、悲しみに沈んでいました。アメリカは私に自由を与えてくれました。でも幸せについてはどうでしょう。どうやってみつけたらいいんでしょう。次の手紙では、もっといいことが書けるようになります。」(ミズーリ州、23才のカンボジア人青年)

「アメリカの食べ物はひどいものです。いとこが7年前からここに住んでいるんですが、彼らはいつもこのおそろしい食事をして平気です。私は、どうしても彼らのようにアメリカ人にはなれなれないと思います。

カンボジアからこんなに離れてしまいました。難民生活は終わりを告げようとしているのに、ちっとも幸せじゃありません。あんなに好きだったカオイタン……仕事をしながら学校に行くつもりでしたが、仕事を見つけるって容易なことじゃなかったんですね。私はこの先どうなるのでしょうか。」(カンサス州、20才のカンボジア人女性)



### コンソーシアムのレター・プロジェクトとは？

米国務省との委託契約によって、フィリピンのパターンにあるプロセッシングセンターでの、英語の集中教育プログラムと、定住国の文化についての教育プログラムを受け持つ、国際カトリック移住協議会(ICMC)が企画したもので、このプロセッシングセンターを経て米国へ第三国定住を果たしたベトナム、ラオス、カンボジア難民から、センターに

居る友達や教師にあてた手紙を教材として、英語はもとよりアメリカの文化・社会を学ぶというプロジェクトである。これらが収集された報告書も出されている。その第一部には、150人の難民からの手紙が掲載されている他、現在米国で彼ら難民の処遇に当るソーシャルワーカー達の、米国で過ごす難民についての所感も寄せられている。なお、レター・プロジェクトは、フィリピンのプロセッシングセンターにおける文化教育の最も有効な教材として使われている。

手紙の中で共通に訴えられていること。

1) どの難民も極めて熱心に、プロセッシングセンターの同胞達に英語習得の必要性を訴えている。特に、「キャンプでは時間があるので、出来る限り英語を勉強しておくこと。米国に着いてからの勉強は、仕事に着けば困難、かといって語学力不足では仕事も得られない。米国に着いてから学べるとするのは甘い夢だった」というのが、最も切実なアドバイスのようだ。

### 2) アメリカの個人主義

アジアとは大変に異なり、人が他人の面倒を見ない。時は金なりという価値観で、自分以外に頼るものが全く無い。複雑な社会の中で非常に孤独だ。この気持ちは彼らの中で一様に強く、ほとんど誰もがプロセッシングセンターでの生活を「同胞と教師に囲まれ幸せだった」と、非常に懐しがっている。

### アメリカの現状

#### 1) 福祉

カリフォルニア州が最高(1人当月額、連邦政府援助250ドル、食糧切手70ドル)で、テキサス州が最低(同130ドル、70ドル)。

#### 2) 職業

素早い就業を勧める難民もいるが、専門職の資格さえ得れば安定した生活の保証される米国社会のしるみを認識して、職業専門学校、大学、語学学校への通学を勧める者が多い。




#### 3) 教育

学ぶ事は成功に通じる。福祉の世話にならず、働きながら夜間の語学、専門学校へ通う、年令も環境も様々な難民達の奮闘ぶりがうかがえる。中には、レストランで働きながらも夢を持って勉強に励み、一年で短大への入学を果たした21歳のカンボジア人少女の手記等、印象的な例も多い。

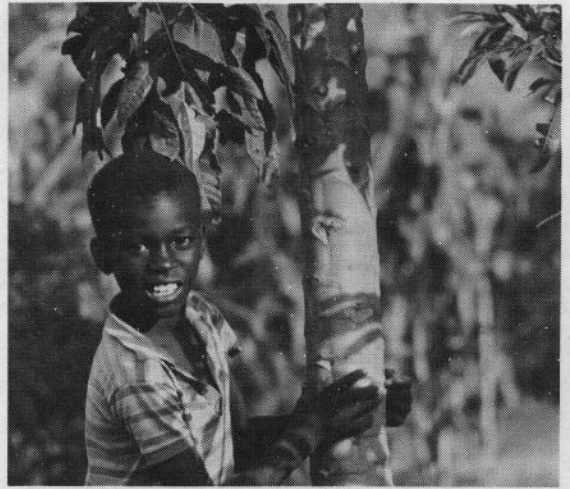
# ICARA TIME FOR SOLUTIONS

SECOND INTERNATIONAL CONFERENCE ON ASSISTANCE TO REFUGEES IN AFRICA  
GENEVA, 9-11 JULY 1984

## 第2回アフリカ難民援助国際会議

今、解決を求めて   

1984. 6. 9 ~ 11 ジュネーブ



ザイールに定住したウガンダ難民。ババピアが突った。

### ☆アフリカ難民の援助計画を協議

今年（1984年）7月、ジュネーブで第2回会議が開かれるICARAとは、アフリカ難民援助国際会議の略で、第1回は、1981年に同地で開催された。

第1回会議では、アフリカ難民の窮状を世界に訴えると同時に、総額5.6億ドルにのぼる、難民援助計画のための基金を生み出すことに成功した。

しかし、多額の援助資金にもかかわらず、難民全体の40%にしか、援助は届いていない。多くのアフリカ難民、本国帰還者は、生活の糧をもたず、援助を必要としている。

このような状況のなか、国連総会の決定にもとずき、第2回会議が開催される。国連事務総長はICARA IIに対して、次の3点を要望している。

第一に、今なおアフリカ難民は直接的な援助を必要としていることを、世界各国に認識させること。第二に、難民を受け入れている国の経済を安定させること。これは、難民の流入により、もとより貧しいアフリカ諸国の経済は深刻な打撃を受けており、受け入れ国の社会的経済的基盤を強化することで、収容力を高めることである。第三に、必要に応じて難民問題の恒久的解決計画を立案すること。これは可能であれば難民の自発的帰還を支持し、それが不可能なときは、庇護国での永住をはかることである。

ICARA IIには、様々な立場の人々の出席が要請されている。まず、難民問題で援助を必要としている国は、その詳細を述べるために。国連及び専門機関から派遣される専門家は、当事国政府とともに何が必要かを調査し、社会的経済的基盤を強化するためのプロジェクト案作りに協力する。援助国と国際機関は、示されたプロジェクトのうちから、支援するものを選ぶことになる。

### ☆悪化が懸念されるザンビアの難民問題

ザンビア南西部のシオマ州には、1970年代から、約56,000人のアンゴラ難民が生活している。この地域に最初に注目したのはLWF（プロテスタント系の民間救援団体）で、1980年のことである。以来UNHCRを中心に、緊急救援プログラムが実施に移された。

しかし、3年後の現在、事態は改善されていない。その理由には、うだるような暑さ、植物の少なさなどもあるが、次の2つの要因が大きい。まず、輸送機関の欠如。乾期には道のない砂地が広がり、雨期には一面が沼地と化し、舟が唯一の機関になる。次には、難民が小集団に分かれて、広大な地域に点在していること。難民の正確な数さえ把握できないのが現状である。そのため、救援物資の到着に気づかず物資を受けとれない村、1年近く援助が途絶えた村などが、少なからず存在する。

その上、この3年間に連続した干ばつが、この地域を襲った。1983年の収穫はゼロに近く、すべての穀倉が空になり、先住民、難民のすべてが、重度の栄養失調と風土病におびやかされている。

UNHCRの関係者が、あるひとつの村を訪れた当日も、1人の成人男子が栄養失調で死亡した。しかし、食物不足の被害を直接こうむるのは子どもたちで、同じその日に6人の子供がハシカで死亡し、20人の新しい患者が発見された。一番近い病院でさえ60km離れており、しかもワクチンはない。

難民の仕事はなく、服、石けん、毛布などもないに等しく、もちろん、学校もない。56,000人の難民のうち、通学した経験があるのは7人だけである。

輸送機関さえ確立されれば、広大な土地と豊富な日照があり、牛を使った農業なども可能である。しかし、現状ではその見込みは立っていない。

「近い将来、事態が改善される見通しは、まったくくない。飢餓は広がる一方だというのに、瀕死のアンゴラ難民は、100人単位で流入し続けている」と、現地ザンビア政府担当者も認めている。

### ☆難民の自立をはかるタンザニアの実験

タンザニアは独立以来、国民一人当たりのGNPが日本の40分の1という状況にもかかわらず、ザイール、南アフリカ、モザンビークなどの難民を受け入れてきた。今、難民の定住化が成功しつつあるミシャモ地区には、ブルンジからフツ族が流入し、UNHCR、CRS(カトリック救済事業団)が定住化をすすめている。

32,000の難民は約400家族ずつ、16の村に分けられ、1家族あたり5haの土地が与えられた。

この地区はもともと森林地帯で、フィンランド人のボランティアが大きな機械で土地をならし、イギリス人のボランティアが難民と協力して井戸を掘り、オランダ、オーストラリア、デンマークからのボランティアは医務室や学校を組織した。タンザニア政府は、タンザニアの行政方式を教え、希望する難民には、タンザニア国籍が与えられている。

いまや、水はすべての耕地に行き届き、道の側面には雨期の表面流水のための溝も掘られた。あと1年もたてば、難民の生活も落ちつき、この土地の管理はタンザニア政府に引き渡される。そのとき、14万ドルもかけたこの自立促進計画が成功か、失敗か決まることだろう。灌漑水路の維持、食糧の自給自足、さらに靴、石けんなどの生活必需品を購入しうだけの生産力を持つこと、などが問題になる。

現在、地区内では、物資が極度に不足している。市場に行っても、玉ネギ、ピーナツ、干し魚(タンガニカ湖から徒歩で23日間かけて運ぶ)が少量あるだけである。なかにはニワトリを4羽売る男、卵を3個並べる男などもいるが、非常な高値である。また、この地域はタンザニア国内でも孤立した位置にある。

上のような観点からすれば、ミシャモ地区の自立の成功を楽観することはできない。しかし、タンザニアは、難民問題に実質的・実際的な解決法をしめした、アフリカ唯一、世界でも数少ない国のひとつであることは、間違いない。

### アフリカ難民問題関連年表

年	☆難民の動き	○難民問題への対応	( )世界の事件
1951年	○	難民の地位に関する条約締結	
1957年	☆	アルジェリア難民20万人がチュニジア、モロッコへ、UNHCRが援助	
1961年	☆	アンゴラ難民15万人余がザイールに。'70年までに40万人に増加	
1962年	○	57年発生アルジェリア難民が帰還(キューバ危機)	
1963年	☆	ルワンダ、スーダン、コンゴなどから、大量の難民がウガンダ流入開始	
	○	アフリカ統一機構(OAU)設置	
1964年	○	OAUN難民問題特別委員会設置(アメリカ軍の北ベトナム爆撃開始)	
1967年	☆	スーダン難民のエチオピア流入開始	
	○	「アフリカ難民の法的、経済的、社会的側面に関する会議」が開催	
1968年	○	OAUN「難民就職教育事務所」設置(ケネディ大統領暗殺)	
1969年	○	「アフリカにおける難民問題の特別な側面を規律するアフリカ統一機構条約(OAUN難民条約)」採択	
1972年	☆	アジア系ウガンダ人の流出(~74年)	
	☆	アジス・アベバ協定のもとに、ウガンダ、ザイール、エチオピア、中央アジアの4ヶ国在留のスーダン人難民15万人が自主的帰還(~73年)	
	☆	ブルンジ人難民2万9000人、ルワンダ人難民1万人、ザイール人難民2万5000人がタンザニア流入(~73年)	
1973年	○	(第一次石油危機)	
1974年	○	ギニア・ビザウ人難民、モザンビーク人難民、アンゴラ人難民が、それぞれの母国の独立によって自主的帰還	
1976年	☆	モザンビークのジンバブエ人難民キャンプが武装攻撃を受ける	
	○	ボツワナの大統領、ナンセン賞受賞	
1978年	○	UNHCR、「アフリカの角」で、特別プログラムを開始	
1979年	○	「アフリカ難民問題会議」開催	
	☆	ブルンジ、タンザニア、アンゴラ、ザンビア、スーダンからザイール人難民19万人が自主的帰還	
1980年	☆	ジンバブエ人難民20万人が、母国独立により、周辺諸国から自主的帰還	
1981年	☆	カメルーン、スーダン、中央アフリカ共和国、ナイジェリアから、チャド人難民15万人が自主的帰還	
	○	「ICARA1」開催	
1982年	☆	ルワンダ系の3万人がウガンダ国内で流民化。3万人以上が故国へ越境	
1983年	○	エチオピア人難民のジブチからの帰還プログラム開始	
	○	タンザニア大統領ナンセン賞受賞	
1984年	○	7月「ICARA2」開催(予定)	

# 声

みなさんの「声」をお寄せいただくページです。トライアル・アンド・エラーについて、JVCについて感じていらっしゃることを、意見などぜひお聞かせ下さい。

とても、はげみになります。

(編集部)

## 特別寄稿

### 難民救援との関わり — タイからヨーロッパへ移って

小野寺 龍二

1979年5月にカンボジア難民のタイ流入問題が注目され出した頃、(タイの日本)大使館で難民問題を担当することになりました。それから、何回ものタイ・カンボジア国境の視察が続き、わが国として単に国際機関への拠出金だけでなく、もっと直接的な援助が必要であることを痛感しました。

5月に一旦流入した難民は一部強制送還され、他は雨季の到来と共にカンボジアのジャングルの中に戻ってしまい、9月には予想通り難民の流入が始まり、その悲惨な状態は世界中の注目と同情を集めました。わが国は、現金拠出の他に食糧援助、メディカルチームの派遣、サケオのメディカルセンター建設、井戸掘り、小規模ダム建設等の措置が矢継ぎやに行われたわけです。

わが国の援助と他の国の援助とでは、基本的な違いはありましたが、現場で難民援助を行っているのは主として民間団体でした。わが国には遺憾ながら、このような時にすぐ出来る団体はなかったわけです。欧米の民間団体のような活動性は、

パキスタンの現場から (T/E 30号)

小池 嘉夫 (パキスタン・クエッタ)

T/E30号を拝読しました。号外も含めて、今回の記事には大変に迫力がありました。迅速な対応には特に敬意を表します。これも草の根的活動、若いボランティアに支えられているJVCであればこそこのことでしょう。戦火に傷つき、命を失った人々、家族のことを思うと、本当に心が痛みますが、誰かが実情を知らせ、それがどんなに小さいものであっても、対策が具体的に講じられなければなりません。その意味で竹内ボランティア、泉看護婦のベイルート入り、同撤退については筆舌に尽くしがたいものがあったことと思います。全体に記事の構成もよく、地図をふんだんに使って解説されたのは、中東事情が一般にはわかりにくいだけに大変よかったと思います。単なる情報誌を越えて皆さまの意欲がにじみ出ていたと思います。

政府と民間が相互に補完しあって援助活動を行なうのが最も理想的であるということを感じました。

同年10月に一時帰国した際、難民問題に冷たいとされていた日本人の間で、何かをしたいという気持ちを持っている人が非常に多いことに心を打たれ、民間一般の人達の善意を行動に結びつけるメカニズムがどうにか造れないものか、といろいろな人と議論し、ようやく輪郭ができたのが1980年正月です。そしてJVCが発足するや、私などが夢にも思わなかったほどの反響を得て、急速に発展を遂げ、カンボジア国境で目立つのは、援助機関が用いる日本型のピックアップトラックだけと言われていたのとは隔世の感があります。

ヨーロッパに来て、難民問題にはどうしても関心が残っていました。オーストリアではポーランド難民問題が発生し、私もキャンプを視察したりしました。勿論、飢えと病という要素はありませんが、祖国を捨てざるを得ない人達の悲惨さは同じです。又、オーストリア人が国をあげて、ポーランド難民及びポーランド国内への援助を行ない、しかも政府と民間の見事な連携プレーにも感心しました。

ドイツ勤務になっても、世界のどこであっても災害、戦争等が起これば敏感に反応し、すぐ援助を国民に呼びかけ、実施する体制が出来ていることを知りました。

## 難民問題の原因・過程も知りたい (T/E 30号)

村主 雅子 (神奈川県・学生)

30号付録の「レバノンによくわからない人へ、P君より」の記事は、たいへんわかりやすく、よかった。世界各地の戦争、貧困、飢餓の内にある人々を救うには、緊急の措置として救援物資輸送などのボランティアの活動は必要だと思う。しかし根本的に解決するには、政治的問題の解決が必要だと思う。その第一歩としては、Trial & Error でも惨状の報告だけでなく惨状の起こった原因、過程などを取り上げた記事を載せて欲しいと思う。もちろん政治的かたよりがあってはならないので、むずかしいかもしれないが、あくまで客観的に情勢を分析した記事を望みます。

わが国は末だ、そこまではほど遠いと言わざるを得ませんが、インドシナで芽生えた人間連帯の精神が大きく育ち、世界に枝を広げて行くことが期待されます。

(カンボジア難民問題発生時の在タイ日本大使館担当官。  
現在、在ドイツ大使館勤務)

## "ガイジン"の目から見た、日本人の中の外国人

ルドゥガー・クーンハート

(ドイツ人。歴史的観点から、世界の難民問題について  
博士論文を記述。現在、東京で研究中)

日本は経済大国として、そのダイナミズムと繁栄は全世界に印象づけられています。日本人一般にとって、いわゆる第三世界の開発問題は貿易や輸出への問題ほど、関心をひきつけていないようです。

その理由のひとつには、日本の中においてさえ、外国や外人に関する日本人の一般的な態度が、明治維新の頃より本質的に変化していないということがあるのかもしれない。

有名な社会学者である中根千枝氏は、日本人の"ウチ"と"ソト"に対する態度について述べています。日本人として生まれた人は"ウチ"であり、日本人として生まれなかった人はつまり"ガイジン"は"ソト"

## T/Eに思うこと (T/E 31・32合併号)

一瀬 英薫 (福井県・公務員)

- ・ ページ数が多いので少くとも良いのでは。
- ・ 活動の有り方を問題としている記事が多いが、活動に参加したものでないとわからないと思う。少し高度すぎると思う。
- ・ 国外のボランティア団体等多く紹介されており、日本人も多く参加しなければならないと思った。
- ・ 文中にある如く、活動が「対症療法」的に思われるが、世人の問題意識高揚のためにも「なぜ援助が必要なのか」を広く社会にアピールしてほしい。
- ・ 現地で活動している方は「国家の安定」が必要なることを感じておられると思いますが、体験を通じて人権とか民族とか国家について感じられたことを述べて欲しい。
- ・ 救援を受けた人々の声を聞かせて欲しい。

に取り残されることになるのです。多くの外国人は、自分達が日本人の社会の中で一種の侵入者と見なされていると感じています。それについては、日本社会の中のマイノリティーである在日韓国朝鮮人の場合がよい例でしょう。

私たちの小さな地球の現在の発展問題において、第一に必要とされているのは、人間としてすべての人々を自然に平等に受け入れる包容力です。外国人であることは、何ら不思議なことではありません。問題は彼らに対する態度なのです。

人間の兄弟愛という概念は、世界へ向けられるより先に、まず最初に自分自身の国において形成され磨かれなければならないものでしょう。

日本の歴史や社会構造は拭(ぬぐ)い去ることのできないものです。日本人自身も理解しておかなければなりません。日本は中国と違う国であり、フランス、ブラジル、あるいはザンビアと違う国ですが、この世界には特殊で優れた国というのはいないのです。

このことを理解することが、人間として外国人を受け入れるための第一歩であり、同時にこれが開発問題への貢献という形で示される、道徳的義務感の高揚、人間性の発露につながるのではないのでしょうか。

# JVCプロジェクト

1984年1月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
<b>タイ</b> カオイダン・ キャンプ (カンボジア 難民)	<b>技術学校</b> 基本的な技能訓練を通じて、本国帰還あるいは第三 国定住していくカンボジア難民(15歳以上)の自立 を助ける。牛車、自転車、モーターバイク、自動車 水ポンプ、発動機の整備技術を習得する。障害者、 女性が家長である家族、保護者のない少年等は入学 を優先する。 1983年1年間の修了生総数 1,487 名。 (うち障害者等54名) 現在訓練中の者 578 名	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会 レフュジー・イ ンターナショナ ル	ソムウェック・ルチャイ シット※、山西 映子 トンディ・ソムカネ 嶋 紀晶、松本 一仁 稲垣三千穂
カオイダン・ キャンプ (カンボジア 難民)	<b>コンストラクション</b> <b>給水</b> =近くのダムから既存の配管までの 4.5km に 対して給水配管する。 <b>電気</b> =夜間の安全のためにキャンプ外周に防犯灯を 設置する。	UNHCR	スラボン・パドウンキア ティ※、永井 聖子 バンチカ・ケオルディ パニット・ポティビ
<b>タイ・カンボジア                      国境</b> (ノンチャン、ノ ンサメット、パン サンゲ、ドンラッ ク、オボック難民 村およびタイ被災 村)	<b>レントゲン移動診療プロジェクト</b> 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災村 の病院への巡回レントゲン診療。 タイ赤十字と共にアランヤプラテート南のタイ農村の 巡回を始めた。外科診療における ICRC (赤十字 国際委員会)、と医療機関との協力は順調に進んで いる。	日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院 WFP/UNBRO	金子 一弘※、林 達夫 サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ・プティ ヤピブン スラ・プロムチャン
<b>タイ・カンボジア</b> (ノンチャン 難民村)	<b>ノンチャン難民村・補助食供給プロジェクト</b> 人口 15,000 人以上のノンチャン村において、①栄養 失調児 ②入院患者 ③妊産婦 ④母親と乳幼児 を対象に補助栄養食を供給しながら、あわせて健康 と栄養に関する基礎的な教育を行う。1月8日-9 日に行った受益者の登録で、2,500 名余りの対象者 が確認された。安全性の面から、ノンチャン村に長 時間留ることができないので、調理はカオイダンキ ャンプの調理場で行われ、「ドライ・バック」(水分 の少ない食物)として現場へ運ばれる。この活動は 83年12月1日から始まり、84年いっぱい行われる予 定。	WFP/UNBRO	大野 直樹※、武田 長久 イサラサク・ジャロンウォン ヤオワラック・スクピティ 近藤美佐子、萩野美智子 スニー・サカオラット トンチャイ・クラタルムボン
<b>バナニコム                      キャンプ</b> (第三国定住待ち の難民の一時収容 施設)	<b>日本語学校</b> 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエン テーション 1月17日現在の生徒数は88名。カオイダンから日本 定住希望者の移動がないため、2月13日から始まる 第11期の新生入生受入れはない見込みである。65名の 生徒が継続して授業を受ける。日本政府調査団は2 月20日頃ナポーキャンプ(ナコンパノム)のみで定 住希望者を面接の予定。	天理教千葉 千葉 県	佐藤 和美※、石丸 寧 鈴木絵里子、森本 陽子 スティーブ・ホフマン ディアン・パントウー

1984年1月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ クロントイ・スラム (バンコク市内 のスラム)	<p><b>スラム改善プロジェクト</b></p> <p><b>奨学金援助</b> スラム児童のための学費援助。現在パタナ共同体小学校、プラティープ財団などを通じて160人の児童に学費を援助している。</p> <p><b>図書館</b> 子供達と大人のための図書館。蔵書約3,000冊、3種類の新聞、10種類の雑誌がそろえられている。1日平均40~50名の利用者がいる。将来は更に積極的に図書館を共同学習の拠点にしていきたい。</p> <p><b>建材提供</b> 当局に立退きを迫られたスラム住民に対する、家屋再建のための材木などの提供。ワットラトプアカオ・スラムの約20家族に支給した。パタナ共同体小学校、JVC図書館を含むクロントイ12区は'84年中に立退かされる。</p> <p>1月13日午後クロントイで火事が発生、約16,000m<sup>2</sup>、200軒以上が焼け、1,000人以上が焼け出された。損害は1千万バーツを越す見込み。</p>	モラロジーMIRC NTV、 今井記念基金、 庭野平和財団、 一般寄付 JOFIC	タウィチャイ・タームク ナノン※ ソンボン・ブンヤバンチャ 伊藤真理子、坂場由美子
農 村 (ブリラム県 など)	<p><b>給水プロジェクト</b></p> <p>'83年12月6日~8日、ブリラム県14カ村41本の浅井戸については、'82年9月~'83年4月にかけて完成したもので、調査の目的は ①「安全な水」を供給することが達成できているか ②村人がどのように新しい井戸を利用しているか ③手動ポンプの故障に際して、どういう維持管理が行われているかの3点である。この調査結果に基づき、ハンドポンプを改良型に取り換える作業を進める一方、トラート県、チャンタブリ県において、深井戸を掘削していく予定である。</p>	モラロジー国際 救援運動推進委 (MIRC) NTV 24時間テ リティー番組	木村 信夫※、 佐藤 正喜、 カモン・ミンムアン
カンボジア 農 村 部	<p><b>井戸掘り</b></p> <p>地域の診療所での井戸掘り 東部、北部農村での井戸掘り(機械搬入中)</p>	OXFAM モラロジーMIRC LWS	養田 健一(待機中)
ソマリア ゲドー地区 (ルーク郡)	<p><b>農業プロジェクト</b></p> <p>マガネイ・キャンプにおける、エチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。</p>	UNHCR 一般寄付	柴田 久史、税田 芳三 山賀 望幸、高橋 一馬
レバノン ベイルート (南ベイルート スラム地域)	<p><b>医療ボランティア派遣プロジェクトおよび緊急物資援助</b></p> <p>レバノンでの被災民(レバノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助および物資援助。</p> <p>毛布などの物資援助については、第1回が83年10月28日、第2回が84年2月4日空路輸送により行われた。</p>	一般寄付 レフュジー・イ ンターナショナル (輸送協力) 日本航空・ エールフランス	竹内 俊之 (1月31日ベイルートを 離れ2月14日一時帰国、 プロジェクトは、時期を みて続行の予定。)
日本 国内活動	<p><b>日本語家庭教師</b> 定住難民の日本語学習援助</p> <p><b>バザー</b>、ハンディクラフト販売</p> <p>カオイダ「国境をこえた人々」上映運動</p> <p>スタディツアー企画・実施</p>	善 倫 寺 小山工業所 一般寄付 西本願寺、高岡 寺族青年会	植田 博 他約30名 東 田 鶴子 他約20名 (鍋田 三芳他) (熊岡 路矢他)

(次頁へつづく)

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京事務所 (本部)	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, 等 機関誌「トライアル アンド エラー」発行	全社協 YMCA 妙心寺 一般寄付 杉並ライオンズ クラブ	岩崎 駿介 (代表), 星野 昌子 (事務局長), 熊岡 路矢, 田島 誠 本橋 栄, 鴫田 三芳 佐々木志保, 他約20名
バンコク事務所 (タイ)	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等 季刊「ニューズレター」(英語・タイ語)発行		高塚政生(バンコク事務 所長) 深津 高子, 石橋 節子 ポンピモン・チャイブーン 森本喜久男, 勝保 江美 カセム・スクタコ他約10名

# JVC NEWS

## ●アフリカでの活動の紹介記事に反響

本年1月, 読売新聞『編集手帳』欄にアフリカの飢餓難民の問題が数回掲載され, JVCにも大きな反響が寄せられた。まず1月5日アフリカの飢えた子供の実情が。次に15日にその反響とJVCのソマリアでの取組みが。さらに24日には, さらに大きくなった反響が。以上の結果, 読売新聞社経由を含めて, 2月末現在, 約400件, 400万円以上もの寄金がJVCに寄せられた。その用途, 詳細は次号に譲るとしてまずは, ご報告とお礼まで。

## ●新プロジェクト始動

昨年12月から国境のノンチャン難民村で, 補助食供給プロジェクトを開始した。(プロジェクト表参照) カオイダンに専用キッチンが完成, ドライバック(写真)の形で村に届ける。1月初め, 対象となる人々の人数を調査した所, 2,500人が登録された。

カオイダンのコンストラクション。給水については, 2月中にダムからキャンプまでの測量を完了した。土木作業は3月から着手。防犯灯設置については, カンボジア人ワーカーの手によりキャンプ外周に約40本の電柱を設置し終えた。3月以降電線の敷設工事にうつる。

一週間分のドライバックを手にする大野ボランティア



## ●レバノン帰国報告会, 全国縦断

砲声とどろくレバノンから, 竹内ボランティアが2月14日に帰国。4月下旬まで全国各地で, 現場での体験と救援活動の実情を, レバノン紛争の構造などを折りまぜながら詳細に報告する予定。レバノン報告会の講演依頼は東京事務所, 担当田島まで。

## ●中米のニカラグアへ人材派遣

福村州馬ボランティアは2月15日, 日本を離れニカラグアへ出発した。彼はJVCのタイにおけるスラム改善事業を中心となって組織してきたひとりだが, 以前から中南米の難民問題に関心を持っており, 今回ICM(国際移住委員会)の研修員として, JVCから出向することになった。

★国際医療保健情報センター(IMIC:アイミック)が仲間を募っています。

昨年の夏より, JVCの軒先をかりる形で, 月1回の学習会と国際医療保健情報誌「Bon Partage(ボン・パルターージュ: 仏語で公正な分配)」を隔月で発行してきた20代, 30代の若い医師, 看護婦の集まりが, この度, IMICとして正式に発足し, 会員を募集しています。IMICのめざすところは, 政治, 宗教にとらわれない真に民衆のための機動力ある民間医療救援チームの結成にあるわけですが, さしあたっては, 国際医療保健に関する情報の収集と提供, 欧米の民間団体との協約に伴う医療人の国際研修, 国内でのリクルート網の充実などを考えています。IMICに関するお問い合わせはJVC(担当・田島)まで。3月24日出の月例会は, JOCS(キリスト教海外医療協力会)の宮崎先生(バングラデシュ)と, 外務省診療所の兼川先生の予定です。

## JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

### ●インドシナ難民救援募金 (1・2月小計 178,944円)

東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

### ●ボランティア募金 (1・2月小計 2,950円)

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

### ●クロントイ・スラム募金 (1・2月小計 25,500円)

バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。

### ●テッグ・スラム奨学金 (スラム児童奨学金)

バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらでも可。(1・2月小計 332,300円)

### ●JVC運営経費募金

事務経費、人件費、通信費等、JVCの仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。(1・2月小計 60,460円)

### ●アフリカ難民救援募金 (1・2月小計 4,333,231円)

●レバノン被災民救援募金 (1・2月小計 171,259円)  
レバノンでの被災者に対する医療活動および物資援助にあてられます。

●日本語家庭教師募金 (1・2月小計 7,000円)  
定住難民の家庭は遠い所が多く、交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。

●医療募金 (1・2月小計 35,000円)  
緊急医療活動のための資金となります。

#### 送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京 9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

#### 《郵便口座の変更》

医療募金は、従来の「東京 7-96238」から他の募金と同じ「東京 9-27495」に変更します。

## 編集後記

遊牧民のイスラム教徒が相手で、物が無いアフリカのソマリアと、戦時下のレバノンから、それぞれ帰国したボランティア達が言うことには、「タイは食べ物もおいしいし、同じアジア人が相手だから、考え方も理解しやすい」「タイほど救援活動がやりやすいところはないだろう」ということだ。

しかし4年前、タイで活動を始めた頃は、みな日本との違いにとまどい、体をこわしたり、ドジを踏みながら悪戦苦闘していた。タイの現場でもまれて、成長してきたものだ。一方この4年間、私たちがインドシナ難民とタイの人々に対して、何をなしてきたのか、厳しく評価、検討するべき時期にある。

#### 「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)

賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

郵便口座番号 東京 3-54186

加入者名 JVC東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。

## JVCより

あなたも「JVC」の会員になってください

現在「JVC」は世界4カ国に約30名のボランティアを派遣し難民救援にあたる一方、国内でも、日本に定住したインドシナ難民の約30家族に日本語教育を実施するなど、様々な形で難民問題に取り組んでいます。また、タイの農村や都市のスラムの人々の生活の改善のためにも協力しています。これらの活動を安定させ、さらに発展させるために、広く会員を募集しています。

会員の方には、機関誌「トライアル&エラー」(月刊)、バザーや講演会など活動の案内をお送りします。会費は次の4通りです。

・一般会員 10,000円 ・学生会員 3,000円

・活動者全員 3,000円 ・団体会員 30,000円

このほか、活動・運営のために、労力や資金を提供くださる方も募集しています。詳細は、本誌巻末のJVC東京事務所にお問い合わせください。

●JVC紹介 ボランティア活動希望者やJVCについて知りたいという方々のために、毎月第1・第3月曜日夕方6時～9時に説明会を開いています。

●本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

## JVCとは

**Japan International Volunteer Center** は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。

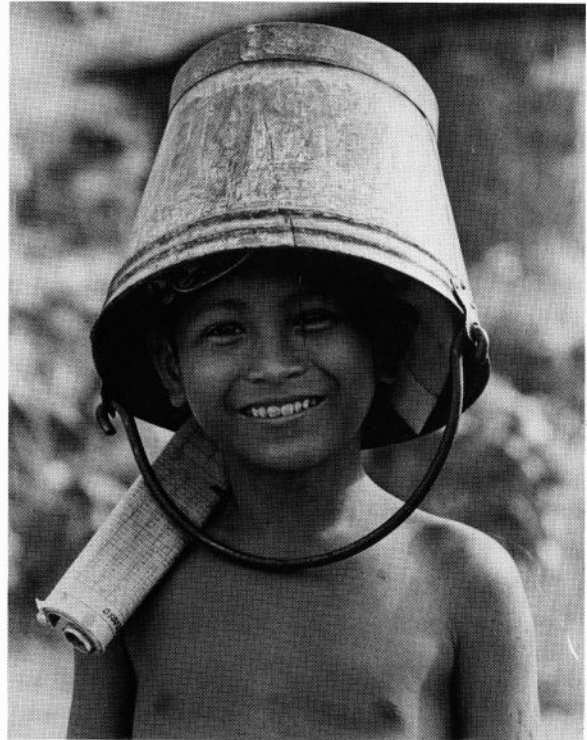
1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア、ソマリア、レバノンで活動している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所は、以上の各現場と連携して、情報、人材、資金を最も有効な形で、活動に結びつける努力をしています。



撮影 小林 正典

**発行所** 日本国際ボランティアセンター  
JVC東京事務所  
〒166 東京都杉並区阿佐谷南  
1-1-5 安田ビル3F  
**最寄駅** 丸の内線新高円寺駅  
**TEL** 03(316)3253

**バンコク事務所** Japan International Volunteer  
Center 67 South Sathorn  
Road Bangkok, Thailand  
**TEL** 286-4857

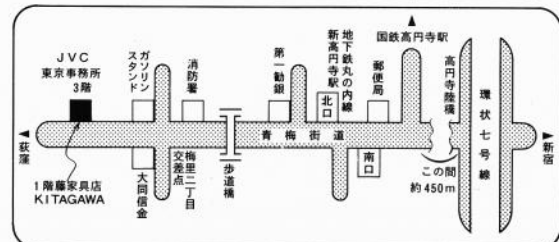
昭和59年3月15日発行  
毎月20日発行

**発行人** 星野 昌子  
**編集人** 本橋 栄

**印刷所** (株)ベスト・プリンティング

## 『レバノン難民救援募金』 緊急アピール

JVCでは、レバノン緊急事態に答え、これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため、緊急アピールを行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。緊急アピールに、一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。



定価 送料共500円